

一念、彼彼、三千、雖遍法界、亦無所在。不可偏有、不可偏無、唯是不思議、一實中道也。雙非亡二邊、雙照恒存空假。雖存空假、無離中道。猶如水結成氷、離水無氷、非水而有氷、終無有是處。是一家終窮之極說、非思量分別之所解。故淨名居士杜口、滿願尊者默然。但一實中道理、雖思慮處亡、四悉隨緣、教亦依言說顯之。故取天台妙樂釋意、欲扶三諦觀解。離三障四魔難、可依此妙觀力。

○一念三千の觀は一家の極談前にいふ如く此章に觀法を明すに二段、上は相對的觀法即ち懺悔滅罪の意味に於て第一義空觀を修することを示す。此より以下は正しく一家の生命たる一心三諦の觀法を明すのである。但しそれも『止觀』の如く、廣く十乘觀法を明すにはあらず、略して要法を示すのが此書の所詮である、それ故に、單に『止觀』の觀不思議境(五之三)に依て一念三千の圓旨を示し、荆溪の語に依て之を天台一家終窮の極說なりと歎美するが終結である。初に、又知三千等は上の

段に、無始の無明を觀せよといふたによりて、それを按へて此の無始の一念に三千の理を具すと知つて、即空即假即中と照し行くが一心三觀なりといふ意。要するに此は一心三觀の定義を下したまでのことである。即ち、一心を無始元初の一念にて解釋したものである。次の、一家所立以下は、文は『金剛論』(私記下二)に據る。意は理具の三千を歎する。文解し難し。乃ち科圖を作つて明瞭にしておかう。

- 一 一家所立等の八字は一念三千の觀は止觀の不思議境に於て、始て、委悉することを標す。
 - 二 於一念以下は正しく理境を釋す。此中三節あり。
- (一) 理に三千を具することを明す。理は吾人現前の一念にあり。その一念に三千を具す(十界)



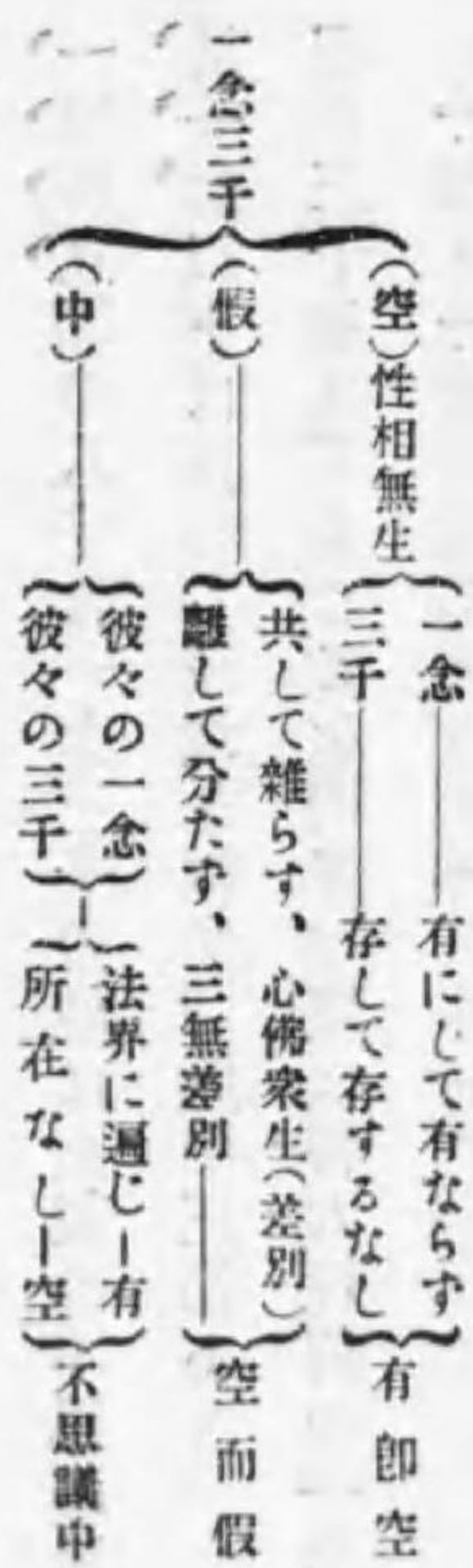
○一念三千の觀は一家の極談

(二) 而此の下は一即一切を以て三千即中道の義を釋す。

三千性是中道 一念一能具 三千 互趣一—— (空、中)——超絶 絕對・中

(不過は互に一に趣いた、その趣いたもの以外に何ものもないといふこと)

(三) 一念三千性相の下は固定の性なきを以て、三千不思議の旨を顯はす。



一三 雙非の下は一念三千を結歎す(此中二項)

(1) 雙遮雙照に約して上を結ぶ。

(是一家終窮等は荆溪の「弘決」五之三三二に一念三千を歎美する語)

(2) 故淨名の下は説默に約して解行を歎す。

維摩の默不二と富樓那の『法華經』五百弟子品に於ける默然領解とを以て中道の言亡應絶を

歎じ、隨自意眞諦には不可説なれども、隨他の俗諦には亦四悉檀機の宜に赴くの説ありと結
び天台荆溪の妙釋あり、以て妙解を開き妙行を立て、速に出離の用意をなすべしといふ意、
三障は惑業苦の三道のこと。四魔・五陰・煩惱・死・天・其他の辭句の解釋は略する。

(二)、凡夫二乗菩薩を對簡す。

(首書本六十七)

凡法界洞朗、無非如來藏理。而我等從無始至于今日、凡夫具縛、
身在如來藏中而不覺不知、行住坐臥爲理所傷、譬如大富盲兒坐
寶藏中、都無所見、動轉罣碍爲寶所傷。二乘不能明見藏理、謂之
爲四住、譬如眇目不明見珍寶、誤謂鬼虎龍蛇。二乘眇目不明見
藏理、珍寶謂爲四住鬼虎等、棄背馳走踰躡辛苦。唯圓實菩薩得
種智明眼、知四住龍蛇等體是如來藏理寶。如來藏理者、大師釋
云、一念心即如來藏理。如故即空。藏故即假。理故即中。三
智一心、中具不可思議云云。是則一心三諦稱如來藏理也。

○一念三千の觀は一家の極談

一心三諦大略如斯。具如第二章。不違_{アラ}委_{シク}記_{スニ}。亦是_レ真言秘密教。阿字本不生_ノ意_{ナリ}也。本不生_ノ者_一詞_ヲ端_{ナリ}也。阿字有_三諦_ノ義_也。故無畏不空_ノ三密同體之說。南岳天台三觀一心之宗_{ナリ}。顯密雖_モ異_ト旨趣_ニ惟_レ同_シ。

此下は凡夫二乗が三千三諦の理を知らずに迷ふて居る様を述べて佛性開覺を勸むる。普通には隠れたるを如來藏といひ顯はれたるを法身といふ。此で一往は分かるが、天台では三諦の理と見る。大體、如來藏の名は諸經論に出づ、近くは『翻譯名義集』五_ノに『占察經』『勝鬘經』等を引く。今は『止觀』一之五_ノの理即の釋を引て一心三諦の理を直ちに如來藏といふ、即ち實相、佛性、如來藏皆一體の異名とする。そのことは『法華玄義』八下_ノ以下に廣く釋す。今此に凡夫二乗を簡ぶ文は『止觀』一之四_ノの文と『弘決』とを取合はせたるもの。凡夫の生、盲は常に如來藏と俱に居れども、知見なきが故に生死に流轉して却て如來藏に傷つけらる、それは柳の枝を幽靈と見て、却て柳に惱まざるゝと同じ。二乗は偏真但空の眇目である、如來藏佛性の寶を見て、三界の見惑思惑として鬼、虎、龍、蛇の如くに怖畏を抱く。猶信解品の喩の如く珠かけながら如來藏に背いて五十餘年貧里に拾_カ解_キしたのである。此に對して法華圓頓の菩薩は四住の煩惱(三界の見思)そのまゝを如來藏と知る。それは『大論』二十七_ニに出づる三智一心得といふ文に依り、之に眼睛を點じて一心三

觀を發明されたのが天台大師であつた。それを特に知らしめんが爲にこゝには大師釋云といつたのである。割注には顯密二教を會合してある。阿字有_三諦_ノ義_のことは『天台真言二宗同異章』_五に一行の『義釋』第八を引て入_レ阿字門_ニ即是_レ毘盧遮那本地身_{ナリ}也、如_ク自_レ觀_ニ心實相_一諸法_モ亦然_{ナリ}是故_ニ諸法皆悉_ク甚深_{ナリ}唯佛與_レ佛乃能_ク證_ス之_ヲ等_といふ。此で見ると毘盧遮那は法華本門の佛であるから佛は實相身である、實相身は三諦である、その三諦を衆生が觀すれば衆生と佛とが入我我入、そこで實相の本地身を觀じたといふのが即ち大日の阿字門に入つたことになるのである、かくの如く考へて見れば此に衆生の三密と大日の三密と同體の意義が成立つわけである、これらは特別の研究を要することである。

三、特に心を空觀に繋ぐべきことを明す(二項)。(一)正明。(二)引證。

(首書本六十九)

一心三諦中殊可繫心於第一義空。凡夫迷情深被_レ封_レ妄_レ我有執_ニ故也。引有頌云、人生百歲情多放逸不如一日歸心空寂云云。

此は前にも第一義空を擧ぐるに拘はらず、亦重ねて此に空觀を出だし心を空寂に歸せよとあるは、一心三觀はいふまでもなく一宗の生命であれど、實は肯定的の觀心故に下根のものには、容易に手に入り難い。それは他なし、此穢土に封せらるゝ有執が甚強いからである。それ故に、その有執の封著を離し厭穢欣淨の途を開かんとするに、此に慇懃鄭重に空觀を教へたまふのである。そのことは和尚に別に『空觀』と題する著作がありて、その結文には、夕思無常、道理存空寂、觀念厭穢、娑婆穢土欣極樂、淨土可唱、南無阿彌陀佛とあるによりても知らるゝ。『玄樞』といふ書は今はなし、首書にいふ如く元唐法師の著作にて三論の宗義を書きしものといふこと『三大部補註』(續藏四十四套三、一七二)に出づ。

四、中觀或は空觀を用て迷の源流に達することを歎じて彌陀の名字に結歸す。(首書本六十九)

是以或時觀達無始無明之源底、或時照了見思麤惑之末流、拂妄想雲霧、顯心性月輪。是名即身成佛。

如貧人ノ家ニ有リ寶藏、而ニ無シ知ル者。知識示ス之ヲ即チ得テ知ルコト也。私ニ除シテ草穢ヲ而掘ニ出シ之、漸漸ニ得テ近クテ近キ已リテ藏ヲ開キテ盡ク取リテ用ルガ之ヲ合シテ六ノ喻ニ可シト解ス云。『弘決』云ク、家ニ有リ寶藏、理即チ也。知識示スハ之ヲ名字即チ也。私ニ除スハ衆穢ヲ觀行即チ也。漸漸ニ得レハ近クテ近キ已リテ藏ヲ開キテ盡ク取リテ用ルガ之ヲ究竟即チ也。云々『大經』ノ貧女ノ譬ノ意ナリ也。是即チ也。近キ已リテ藏ヲ開キテ分眞即チ也。盡ク取リテ用ルガ之ヲ究竟即チ也。云々『大經』ノ貧女ノ譬ノ意ナリ也。是

名直至道場。實譬中明珠。亦無上寶珠也。彌陀名字之所詮、往生極樂之指南也。莫忽諸。

前に一心三諦の中道觀を示し、更に空觀を明して、厭穢欣淨の道を開きたまふ。今それを結歎して或時は中道觀を用ひて無始の無明を觀破せよ、或時は空觀を修して見思の麤惑を斷盡せよといふ、前者は八識を所觀とし、後者は第六識に通することを暗示したるもの。この中道觀と空觀とによりて彌々厭欣の道が開かれ、一心三觀の上に見佛見土の即身成佛義が成立つといふ意である。之を『法華經』の譬喻品には直至道場といひ、安樂行品には大王の譬中の明珠を取出して與へられたに喩へ。又信解品には無上寶珠不レテ求自得、といふてある。是等は皆この即身成佛義を讚嘆する教語である。終りに彌陀の名號の所詮といふも亦この外はない、即ち阿彌陀の三字は即空即假即中であるから往生極樂の指南は實に此にあり。是故にこの趣を輕視するなかれ、諸を忽せにする莫れと誡めたまふ。細註に六即義を出したのは即身義を取謬りて未得謂得の増上慢に陥入らんことを恐れて。即の法の即身成佛を知ると同じく人の情智に六の別あることを忘るゝなどある周到なる用意かと思はる。猶六即のことは『妙宗鈔講要』に詳述したれば今は略す。

五、圓機未だ熟せざるも猶須らく強毒すべきことを明す。

百八十二
(首書本七十一)

但下劣根機、聞幽微之理、有毀訾者、有嘲哂者、或癩聞、或增眠、其時應作此念。我無明毒氣深入、不堪妙法良藥也。縱雖不順心、遂應有巨益。孔丘云、良藥苦於口而利於病、忠言逆於耳而利於行。云云。俗典如斯。佛教准之。

科に強毒といふは『搜要記』三十五に、不輕尙以佛性強毒とあるを用ふ。『法華文句記』十八頁に如勝意、雖現不引受聲納於懷とある。毒は本人の望む所ではない。元より飲ませられて飲むことにも自覺はないが、それを他から強いられて飲まされたとすれば、それは必ずその毒氣が効を顯はさずには居らぬ。今もこの圓頓の教が其の人の心になはずとも強毒して僅に耳に圓聞を觸る、ばかりでも終には安養に往生して本覺法身を證する身になるぞといふ意。不輕菩薩は無信の人に對しても禮拜を行ひて、益々彼等の迫害を受けられしが尙撓まずに我れ汝を輕賤せずといひ合掌禮拜されたれば、彼等はこの強毒によりて佛性を開覺するに至つた。又勝意菩薩のことは『大論』六十三に出づる。昔二人の菩薩あつて一を喜根といひ、他を勝意といふ。勝は喜を誇る。即ち喜は姪欲即

是道、志疑亦如是等の偈を説く(『無行經』に出づ)。之を聞いた勝意はこの大乗法の意義を知らぬ故に大に誘つた。その罪によりて墮獄したが、終に人中に生れて解脱を得たといふ。今三諦三觀も下根の機は或は信せず誘ふべけれども、想へ、汝の身には毒の如く忌み嫌はんも、その毒の氣深く入りて那ぞ知らむ、この妙藥は耳に圓聞を歷れしばかりにても、遂には大利を得るなるべし。俗典にすら忠言良藥の利あるをいふ。何に況や佛陀の金言に於てをやと。我の字、辭書になんち、おのれの意味に用ふとある。語例に「蟋蟀秋のうければわれもさぞ、長き夜すがら鳴き明かしつる」。俗典は首書に『孔子家語』を指す。

三、一心三諦觀を結歎す。

(首書本七十一)

凡三世諸佛之說法、十方大士之弘經、偏以一心三諦爲最要、衆生出離生死根源故也。三教權門助道之方便耳。

一心三諦の觀法は諸佛說法の最要、大士弘經の根本である、されば吾人出離の道は此外にはない、唯一乘法の妙觀は即ち是なることを歎し、前三教の權説は皆此の一心三諦の爲の助道方便なりといふ。

○第八章 空觀を修し懺悔を行ぜしむ (三段)

一 正しく前の觀門を助成せんが爲に無生の理の懺悔を行することを明す。(首書本下三)

第八修空觀行懺悔者、修以前觀門、雖罪業無殘、而妄情至拙、猶常迷有故、重明萬法皆空理、懺悔無始已來罪根。凡懺悔衆罪之要、莫如觀理性之空。

此の一章の大意は初の一段に顯はる、抑々生死の本源を尋ねて、無始の無明を視達し、本覺法身を覺了せしめんといふは天台一家の宗教。而かもその視達の方法は一心三觀即ち一念即三千即空假中と照し行くのである。されど妙解を開く邊は相即圓融の義理が會得されても、觀道實行の方法としては別教次第の三觀に附順して往くといふのが自然の成り行きである。例へば性具三千の妙戒といふても、あたまから持犯を無視することはならぬ。必ず世間情謂の善惡に附順して、止作の行用を立て、行くのである。かくて圓解の如くに遂に違順不二の理に稱ひ、出世頓理の行を成するに至るのである。それ故に梵網大乘の戒條に契ふものは、自然四分小戒の細條をも捨てぬ、態度であら

ねばならぬ。大河は細流を捐てぬやうなものである、若し細流を捐てなば大河の大河たる意義は得られぬ。今も圓教と別教との次第不次第、隔歷圓融の教義は別なれども。實行は必ず次第に附するを便宜とする。況や下根愚昧のものには猶更のことである。彼の天台智者の如きすらも、曾て南岳の會下にあつて、普賢道場に法華三昧を修し、先づ第一に初旋陀羅尼の空智を發得せりといふ。是れ決して別教次第の觀慧ではない、法華圓頓の妙觀妙空の三昧である。今此書に教ふる所は前來の所明の如く、阿彌陀三諦の實相の念佛一心三觀なることはいふまでもない。この理觀の念佛によりて罪業殘る所もなく滅盡すべきは道理なれども、哀哉事實は圓解と伴はず。即ち無始已來の顛倒妄念は益々多く甚強く、常に娑婆執著の實有に引かれて、却々觀道が進み難い。是に於て既に第七章にも、直ちに一心三觀を明かさずして、先づ第一義空觀を教へ、且つ後にも重ねて一心三觀の中の空觀を特に修學せよと示されたことであつた。今亦此章に於てもその意義に於て、此に重ねて一心三觀の中の妙空を明し、此によりて無始已來の罪根を懺悔し消滅して、その懺悔を扶助として圓融の妙境に進み行け、然らずんば縦ひ圓乘の妙縁を結びても、猶見佛聞法し難からんといふ意。此の意を以て即空無生の理の懺悔を勧めらるゝが此一章の大意である。併し乍ら猶此に疑問のあるのは若し然らば第七章に既に第一義空觀を懇切に教へられたことなれば、この章の重説は無用なるにあ

らずやど。然り一往は疑難の如くなれども、義分の異なる所あるを知らねばならぬ。第七章の所明は大體が出離生死を目的とする視法を教へたのである。それ故に根本妄我を破るが所詮である。されど今陳ぶる如く實行の上には先づ娑婆の有執を離るべく空視を修するが順序であるから、一心三視を明すに先つて、第一義空視を教へたのである。勿論依據の諸文は皆懺悔滅罪の方法を説いたものであるから、この疑難も尤である。予の彼この説明も懺悔の視といふた。然し、彼には懺悔として教へたのではなく、出離の視としての引用である。故に空視を修するにも無始無明の根本を對治すべく、教へられたことは明かである。今この章にもその依據の文を同じくする故甚だ重複の嫌があるが、引用の趣旨に至つては、大に異なるので、此は正しく六根の罪垢を洗除し娑婆執着の念を解き特に安養の往生を期する上には臨終の正念を得る法はこの空視の外なしとせられるのである。これ實に先にもいふ如く、和尙の實驗の視法なれば尤も懇切に示されたのであらう。要するに第七章は出離生死を目的とする視法を主とし、此章は全く理の懺悔滅罪を實修せしめるのが趣意であると思はる。

○懺悔の研究 第二篇一四 (頁)

二 理の懺悔即ち空視を修する方法を示す。(此下三節)

(一)四句推檢を指す(二項)。①、正しく明す。②、文を引いて合せ釋す。

(首書本七頁三)

若爾云何觀之。謂以自他共無因四性推檢諸法、而不可得也。如以眠心共離推夢不可得也。

〔止觀〕云若依心有夢者、不眠應有夢。若依眠有夢者、死人如眠應有夢。若眠心兩合而有夢者、眠人那有不夢時。又眠心各有夢、合可有夢。各既無夢、合不應有。若離心離眠而有夢者、虛空離一、應常有夢。四句求夢尚不可得。云何於眠夢、見一切事云云。諸法亦爾。從法性心不生。從無明眠不生。共而不生。離而不生。故「中論」云、諸法不自生、亦不從他生、不共無因、是故說無生云云。能觀之心、所緣之境、一切皆如是。

○四性推檢の解説。既にいふ如く此章に明す懺悔は無生の理懺にして、それも藏通二教にいふ如き

但の空理ではない、圓教の三諦相即の妙空である。その妙空の觀を修する方法の尤も適切なるものを求むる意にて、先づ問を發して、次に答に、妙空は總ての性過を離れたるものなれば、四句推檢して見よ、必ず諸法の不可得なる見地を得るであらうといふ。是れ此一段の大意である。四句推檢といふは性計を離れしむる一種の觀法の範疇である。自より生ずとせんか然らず。他より生ずとせんか然らず。然らば自他共して生ずとせんか然らず。自他を離して獨り生ずるか然らずと、是れが四句の推檢である。此は下に引く龍樹の『中論』一五の文より出づ。そして此段は全く『止觀』の修徳の不思議境を明す中の文を擧げたものであるから先づ、『止觀』の文の起盡を意得て置かねばならぬ、然らざれば文の位置も分らず、喩の趣意も通りかねる。故に煩を厭はず、先づその前の文を譯述して見る。

此の引用の文の前に、理性の不思議境を明してある。されど理性は客觀界のこと故に性計の過はない、けれども修徳に至つては觀行者の主觀の用意なれば性過を研究せねば危険である。それ故に四句推檢して眞理の上には吾人の認むる性のなきことを知らしむるのである。文の意は、先づ問を擧げて、心は緣慮の性質あるもの故に攀ち附く對境がなければならぬ。即ち此に法ありとすれば、是に對して心が起るその心は緣に託して生じたりとすれば、能緣の心、所緣の境となる。此に於て更

に考へる、心に三千即ち一切の法を具するとせんや、緣に三千を具すとせんや、亦は共して具すとせんや、亦は心も緣も離して具すとせんや。若し心に具するならば心の起る時に緣は入用ではあるまい。若し緣に具するとせば既に緣に具す何ぞ心に關係することあらんやといふことになる。若し心と緣と共に三千の法を具すとすれば、未だ緣合せざる時には三千がなかつたといはねばならぬ、それならば緣合した時にも同じく三千の法なしと謂はねばならぬ。若し心と緣と離して三千を具すといは、既に心を離れ緣を離れたものが、忽にして心に三千を具すべき道理あらんや。されば四句を以て求むるに三千不可得である、如何ぞ三千の法を具すなどいふや。是れ四句を以て思索上に問責したるもの、次に借に答ふる人を設けて考察の非なる點を指斥する。それは前に六入觀の論に引合はせて置いた地論宗と攝論宗の人師である。先づ地論宗の人は法性生法。攝論宗の人は梨耶生法。若し地論宗の人のいひ分にするならば、心は自性清淨心である、この心より一切法を生ずるといふそれならば此の考は自性計に陥る。攝論宗の人は眞如平等の大海に無明の風がかゝつて萬法の波を起したるもの故に梨耶即ち無明より一切法を生ずといふ。それならば無明の緣より生ずる他性計といはねばならぬ。然らば改めて地論師に問はん、法性が一切法を生ずといふならば抑々法性は非緣非心のものではないか、非心で而かも一切法を生ずといは、同時に非緣も一切法を生ずと

いはねばならぬ。何故に法性即ち自性清淨心の一邊に依りて、法の生ずる道理を語らんとするか。又攝論師に問はん。一切法の生ずるのは法性を依持とするのでなくて梨耶を依持とするといふのならば、法性を離れて別に梨耶があるといふことになる。されば法の生ずるには法性には何等關係のないことになるではないか。又梨耶を離れずして法性があるといふならば、梨耶を依持とすると同時に法性を依持とするといはるゝではないか。何ぞ獨り梨耶ばかりを取つて一切法を生ずる依持處である主張するや。かく論じ來つて此に違理の失ばかりではない違教の失もありといふ。即ち『大品般若經』八_五には非_レ内非_レ外亦非_レ中間亦不_レ常自_レ有_レとあり。又龍樹『中論』に諸法不_レ自生亦不_レ從_レ他生不_レ共不_レ無因_レといふてある（此書引用の文）此に違するではないか。かくの如く論じたる上に、更に譬に就て四句推檢せんといふて。先づ初に問定して置く。心に依つて夢ありとせんか、眠りに依つて夢ありとせんか、眠りが心に合するによつて夢ありとせんか、心をも離れ、眠りをも離れて夢ありとせんか」と、この問定即ち問を起して答者をしてその何れかに考察思慮を定めさせるのである。されどその何れにあるも四句の一邊に固定し封著せば、乍ちに性計に墮して眞正の立論に至らずといふのが、その次に出づる即ち此書に引いた文である。是れが天台大師の龍樹を承けし否定的にいへば空主義、肯定的にいへば中道主義、若しそれを具體的にいへばこの

『中論』が『大論』の三智一心中得、と一致して即ち一心三諦三觀の宗義となつたといはるゝのである。但し今の議論の進行は、その否定的方面にある故に、和尚は此の娑婆の有執を破する無生の懺悔の引證に、この止觀の夢の推檢とその出據の『中論』の四句とを用ひたのである。かく會得して此の書の文を見ると明瞭になる。即ち文に就けば、若し心に依つて夢ありといふならば眠らぬときにも夢はあるべき道理なるに、事實はさうではない。此は自性計を破す。若し心を離して只眠りより夢を生ずるといふならば死人にも夢あるべきに、事實はさうではない。此は他性計を破す。若し眠りと心と兩つ合して夢ありといはるゝ、眠りさへすれば必ず夢を見るべきであるか。又眠りと心と各々何れにも夢があるならば、合して亦夢ありともいはるれども、既に各自が獨立して夢を生ずることのならぬものならば、合して夢を生ずる道理がない。若し然らば心と眠りと離れた處に夢が生ずるかといふに、虚空に常に夢ありとは到底それは思はれぬ。（男のみでは子は生めぬ、女ばかりでは子は出来ぬ、男と女と合しても子は出来ぬ、さうかといふて出来ぬには局らぬ、されど木の枝には子は生らぬ。此は四性推檢の否定論。生めぬは破情の空生めるは立法の假生めるに限りず生めぬに限りずは雙遮、亦は生める亦は生めぬは雙照、この雙遮雙照は絶對の中道。此は一三心觀の肯定論。）この心眠夢の喩を合法して、法性を心に喩へ、無明の梨耶を眠りに喩へ、そして夢は一切諸法に喩ふ、一切諸法の夢は法性の心より生ぜず、無明の眠より生ぜず、共しても生ぜず、離

しても生ぜず、森羅萬象三千の諸法は四句推檢して不可得空、三界は悉く是れ夢空ら事、「夢の世に夢に夢見る夢人の夢物語りするも夢なり、」一夢の世を夢の世なりと知りながら驚かぬこそ驚かれけり。是れが空觀の光景である。

(二二)、常に心空を尋ねれば終に心妙境に入るべきことを明す(二項)。山、正明。

(2)、引證。

(首書本下七四)

尋常之時不修習空觀者、瞑目之尅三種愛難治歟。遺穢土執受淨國生、偏可依空觀之力也。是觀無生懺悔。是法華三昧行法也。造次顛沛不雜餘念。或取譬於空華、或寄思於谷響、靜案之苦觀之實一切諸法有而不有如旋火輪、不有而有如乾闥城。而森羅萬法以心爲主。以心有故、一切皆有。以心空故、一切皆空也。尋心有無、可入妙觀。
(2)「法華玄」云、心如幻炎。但有名字。名之爲心。適言其有、不見

色質。言其無復起慮想。不可以有無思度故、名心爲妙云云。

○無生の理體は法華三昧の行法なり。文意は即空の理體を法華三昧とするにあり。故に妙の字の釋を以て結證とす。瞑目は臨終に目をふさぐこと。三種愛は常に能くいふことなれども未だ典據を知らず、首書に「釋氏要覽」下^四を引く。「唯識鈔」に出づといふも何書なるを知らず、四愛を擧ぐ。一、自體愛。二、眷屬愛。三、資産愛。四、當生愛。今の三愛は此の中の二三を合して境界愛とする。首書に引く千觀僧都の「十大願」参照すべし。

是觀無生懺悔是法華三昧行法也とは、前にいふ天台智者か南岳の會下にて、法華三昧の前方便初旋陀羅尼の空智を得たることを意味したるものであらう。造次は何をする時にもといふ意顛沛は物をヒツクリかへすやうないそがしき中にもといふ意。乾闥婆城は蜃氣樓のこと。一切皆有等の四句は「弘決」五之三、四左の文。「法華玄義」は一上^六妙法蓮華の觀心釋、妙の下。

(二三)、重ねて心は生死の本源なることを示して、心空觀を修することを勸む(三項)。

(1)、正しく勤む。(2)、有を執じて業を造ることを明す。(3)、空觀は頓に重罪を滅することを明す。(首書本下七四)

(1)今識心體本來空寂、悔依執有而所造業。

○無生の理體は法華三昧の行法なり

以所執實有故在五欲境。「心地觀經」曰、心如猿猴、遊五欲樹、不暫住故。心如僮僕、為諸煩惱所策役故云云。依煩惱所使、造十惡五逆。六情根所犯罪、遍滿二十五有。三途八難無不經中。輪廻無量業、皆從自心生。故心生死根本、衆苦之源也。

「普賢觀經」曰、釋迦牟尼名毘盧遮那遍一切處。其佛住處名常寂光云云。寂光理通如鏡如器。諸土隔異如像如飯。當知諸法影像寂光理鏡。一色一香無非中道。而妄想分別受諸熱惱。今覺鏡體之明徹、不執影像之假有。生重慚愧、發露懺悔、惡業煩惱一時消滅。「心地觀經」曰、如是心法本非有、凡夫執迷謂非無。若能觀心體性空、惑障不生便解脫云云。上所引文曰、令此空慧與心相應、譬如日出時、朝露一時失云云。罪業雖無始積聚、一空觀力令然也。如千歲闇室挑一燈之時、衆闇悉除。「未曾有經」曰、前心

作惡如雲覆月、後心起善如炬消闇云云。

一段の文意は科の如し。「心地觀經」第八、觀心品第十(七歳十五套八、七三七)に出づ、依煩惱所使以下「普賢觀經」の文に至るは引文ばかりではない、依煩惱等の文意も、全く「普賢觀經」(義疏下續藏五十五套二、一七八)に依る、その經文を抄出すれば。

空中ニ復有微妙音聲、作如是言、汝今應當身心懺悔、身者殺婬、心者念諸不善事、造十惡業及五無間業、猶如猿猴亦如藕膠、處處貪著、遍至一切六情根中、此六根業枝條華葉悉滿三界二十五有一切生處、亦得增長長壽、無明老死十二苦事、入邪入難無不經歷、汝今應當懺悔、如是惡不善業。爾時行者問此語、已問空中聲、我今何處行懺悔法、時空中聲即語是、語釋迦牟尼名、毗盧遮那遍一切處、其佛住處名常寂光、等

とある、是れ即ち經の上では前に身心を懺悔することを説く、それを承けて何れの方面の佛に向ふて懺悔せんかと問ふて、答へに、釋迦牟尼佛は毗盧遮那遍一切處である。その所住は常寂光土であると答へたは所著なきを示した文である。されど今和尙の此に引用せらるゝ趣きは、この「普賢觀經」の身心懺悔の文意を以て上の「心地觀經」の文を釋成し、更に遍一切處常寂光土の文に故らに

○無生の理懺は法華三昧の行法なり

經名を冠らして、次の「心地觀經」と同一にして、心性本空なれば諸法差別の妄想も寂光の理鏡に照せば忽ちにその封著を解くといふ意に用ひたまふと思はる。それ故に科文も普賢觀經以下を上と引き離して段落を新らしくしたのである。寂光は理土、諸土は同居、方便、實報の三土。四土のことは前に出づ。諸法影像等の二句の訓點は首書本は誤る、注意すべし。一色、一香無非、中道の文は「止觀」圓頓章、(一之一功)に出づ「弘決」三之二理には、大品云とす、されど古來いふ、經文になし、大師の取意したまふものか、實地房は取意の文として、その参考に、經の色是真如聲香味觸法是真如といふを出だせり(「止私記」三本三十一)。重慚愧は第二篇「懺悔の研究」の下にいふ如く無生の理懺のことである。次の「心地觀經」の文は觀心品の偈の最末の語、(正藏十五套八、七三七)上、所引文とは第七章註に引く「止觀」の文。令然とは日出て、朝露の一時に消ぬ失せるといふを指す。千歲閻室の喩は諸經に出づ「大集經」一五「大乘厚嚴經」上十「寶積經」三初等、今は「止觀」一之五三十一「如來密藏經」下十を引くに依る。「論註」八番問答にも出づ。「未曾有經」は下卷(正藏十一套四、一八一)に出づる、波斯匿王の夫人の前身提章の爲に辯才道人が説き教へたる語。嚴密なる意味の懺悔滅罪は小乘には説かず、大乘特殊の法門である、此等の教語は尤も記憶し置くべきものである。

三 理懺悔を結んで念佛三昧に歸す。(三節)

一、無生の理懺は眞の念佛三昧なることを明す(二)。
 (一)、二經を引いて歎す。

(首書本三十七)

又嚴冬之氷雖厚、春風吹兮解之。寒夜之霜雖深、朝日照兮消之。觀無生懺悔亦復如是。故、

「普賢觀經」曰、衆罪如霜露、慧日能消除。是故應至心懺悔六情根云云。是名大懺悔、名莊嚴懺悔、名無罪相懺悔、名破壞心識懺悔也。「心地觀經」明理懺悔云、一切諸罪性皆如。顛倒因緣、妄心起。如是罪相本來空。三世之中無所得。非內非外、非中間、性相如。如俱不動。眞如妙理、絕名言。唯有聖智能通達。非有非無、非有無、非不有無、離名相。周遍法界、無生滅。諸佛本來同一體。唯願諸佛垂加護、能滅一切顛倒心。願我早悟眞實源、速證如來無上道云云。

○無生の理懺は眞の念佛三昧なり

今行此理懺悔則眞念佛三昧『佛藏經』念佛品曰見無所有、名爲念佛。見諸法實相、名爲念佛。無有分別、無取無捨、是眞念佛云。

前後所明中道第一義等觀、悉皆應攝入理懺悔並念佛三昧云。

○無生の理懺は眞の念佛三昧なり文相として無生の懺悔その物を説明するが主であるけれど。文意としては無生の理懺を阿彌陀三諦の念佛三昧に會合し結歸する處が中心であらう。細註の數語はその意を示すものである。是名大懺悔等、是は『普賢觀經』に出づる懺悔の嘆美語である。此は『金光明文句』三三三に三諦に配釋して、而も三差別するは別教隔歷の三諦となる、一に即して三、三に即して一なるを圓妙の懺悔といふとある。但し『金光明文句』には破壊心識懺悔を省く。大を中道とし、莊嚴を假諦とし、無罪相を空諦とす、然るに『義疏』(宋本如)には破壊心識といふは前三が俱に著を破するにあることを示すといふ。此は尤もな釋と思ふ。今この引用はその破著の點が必要であるから、經文のまゝ、四種を擧げらるゝか。次の『心地觀經』明理懺悔云とは報恩品の文(卍藏十

五套、八、七一六)經には事の懺悔と理の懺悔の二門を分つ、常に能くいふ三品の懺悔とは事の懺悔である。今は理の懺悔の文、即ち心を攝し、正念に住し、世間の塵務諸縁を遠離して、諸佛の微妙淨法身を觀じ、一切諸法不可得空の理を照して、經の如く修養すべき旨を説かる。經文の意は三世不可得、三諦即空、生佛一如なれば諸佛我に感應して能く成佛の目的を達せしめたまふといふ意、此に彌陀佛を觀念するは即ち眞の念佛三昧なりといふを含めて、次に『佛藏經』を引いて證明せらる。『佛藏經』は念佛品の文(卍藏十七套二、一九六)。勿論この念佛は三寶通念の念佛なれども、今は彌陀は法門の主なれば阿彌陀三諦の一心三觀のことを眞の念佛といふ。而かも今の明す所は無生懺悔の妙空觀の念佛である。無所有は即空、諸法實相は三諦、無取捨は遮情の妙空と見ればよろしからう。細註に前後とあるは、第七章註に中道府藏の靈藥といひ、同處に我心自空とある。又註には一心三觀を明す。註第一義空等とあるを指すならんか。『往生要集』には助念方法に七科を分つてその第五に懺悔衆罪を明す、今の文と互に出沒あり、對映せらるべし。

二、懺悔の勝益を問答して念佛三昧力を示す。

(首書本八七)

問、如是懺悔有何勝德。答、心地觀經曰、在家能招煩惱、因、出家

○無生の理懺は眞の念佛三昧なり

亦破清淨戒。若能如法懺悔者、所有煩惱悉皆除、懺悔能出三界、懺悔能開菩提華、懺悔能見佛、大圓鏡、懺悔能至於寶所云云。修此懺悔、心如流水、不住法中、洗除六根罪垢、身心清淨。「大論」曰、念想觀已除、戲論心皆滅、無量衆罪除、清淨心常一。如是尊妙人、則能見般若云云。念念之中、照了諸法、不受不著、是則能見般若也。以此因緣、得與三昧相應。三昧力故、即見普賢文珠、觀音勢至、及釋迦彌陀等十方諸佛、摩頂說法、一切法門悉現一念中。譬如明鏡不動、色像分明、淨水無波、魚石自現也。

三、正しく上を結して發菩提心を激勵す。

誰聞如是法、不發菩提心。除彼不肖人、癡冥無智者。

前に無生の懺悔を眞の念佛三昧なりと釋成せしにより、それを承けて、此にその三昧の勝益を示す。それは自然の順序であらう。最後にかくの如き勝法を聞て菩提心を發し同じく俱に極樂に往生

せんと願はざるものは、不肖の子である。釋尊の法中に生れながら眞の佛弟子ではない。又若し之を聞いて發菩提心せざるものは、豫て佛が「法華經」譬喻品(二上)に無智人中莫說此經と説かせられた如く、實に寶の山に入りながら、寶を取らぬ無智人といはねばならぬ。要するにそれは次章に明すべき發菩提心を激勵して此章を結んだのである。

さて文の上を見るに又「心地視經」の在家出家の文を引く。これは報恩品(卅藏十五套八、七一五)の文である。乃至の處には煩惱の皆除くるのは、世界壞滅の時に切火が須彌も大海も皆焼き盡す如く懺悔はよく煩惱の薪を焼く。又能く天路に向ふ。又よく四禪の樂を得る。又よく寶珠を雨らす。又よく金剛壽を延ばす。又よく常樂の宮に入る」といふ數語を省略せらる。簡約を尊むが爲であらう。此の文中、能見佛、大圓鏡とは佛知見に悟入すること。寶所は「法華經」化城喻品の喻、三百由旬の化城は三界を離るゝに喩ふ。五百由旬の寶所は更に方便有餘土を経て實報土に至り大般涅槃の寶を得るに喩ふ。次の心如流水、不住法中、等は「普賢觀經」の文、法に住著せぬといふこと。「大論」は十八の文、「止觀」二之三、五之四に引く、その下の「弘決」に釋がある。首書に引く。念想の觀とは法に住著する心をいふ、有にあらす空にあらすと否定して、此に中道があるのちやと住著したならば、それは既に中道ではない。磁石を見ても知らるゝ、兩極に離れて中性があると謂つて、

中間を切斷して非陰非陽の中性を得んとしたならばそれは大きな笑はれ者になるであらう。笑はれ者は戲論者である、笑はれて腹を立てれば戲論によつて罪を作ることになる。之に反して、念、想、か止めば戲論もなくなる、戲論が止すれば罪は除くる、かくて心の本性に復して、本來常住の清淨本覺が顯はれる。次に又三昧力故とは『般舟三昧經』上十(卅)滅六套十、八二に佛が行者の定中に現前するは三事あるによるとあつて、一に佛威神力、二に三昧力、三に本功德力とある。此は善導の『觀念法門』にも引かれ。親鸞聖人の『教行信證』信卷にも用ひらる。天台の扱は『妙宗講要』(註)に辨じて置いた。摩頂のこと前に出づ。譬如明鏡等は『法華玄義』八下十に出づる語、『釋籤』に無明滅すれば法身顯はるゝを譬ふといふ。今は懺悔の功德に由つて諸罪消滅すれば妄念動かざること明鏡の如く、又淨水の波なきが如し、此に法身顯現し三十二相の淨妙なる佛身を見るといふ意。誰聞如是法以下四句は『維摩經』佛道品の結文、『註經』七(卅)滅二十七套三、二五二に出づ。文意は前に述ぶる如し。

○第九章 眞正の菩提心を發さしむ (五段)

一 菩提心は往生極樂の業因なることを明す(三項)。

(1)、義を立つ。(2)、證を引く。(3)、結釋す。

(首書本九七)

第九發眞正菩提心者(1)往生極樂業因、菩提心爲根本(2)『安樂集』引『大經』曰、凡欲往生淨土、要須發菩提心爲源云云(3)當知菩提心是欣求淨土綱要也。

○發菩提心を勤むる理由此章は標目の示す如く發菩提心を勤む。それは序文の下に十章の布列を論じたる如く、出離行願門の中に行と願と分かる、元より上根上智の人は觀不思議境、即ち一念三千の觀行のみにて、生死の本源を究の無始已來の無明を破すべきであるが、中下根に至つては縱分圓頓の妙解は相當に開かれても妙行の觀心はなかく進み難い。殊に此書は尤も低級なる凡愚を對機としての撰集であるから、既に觀心の下にも尙助成の爲に無生の理懺を説示せられたほどである(第八章)仍て今も單に觀心のみにては行者を攝益することが覺束ない。否不可能なことは明である。

○發菩提心を勤むる理由

よつて、茲に觀行に對する慈悲誓願の一門を開き、發菩提心四弘誓願を以て觀道の運用を自在ならしめようといふ趣旨であらう。それは『摩訶止觀』の十乘觀法が既にその意味をもつて教へられてある。上根のものは第一不思議境を觀するのみにて、初住已上に登るべきも、中根は第二乃至第七を用ひ、下根は更に後の三を用ひねばならぬといふ。そのことは近くは『止觀大意』を披けば明かに知られる。今は第二眞正發心の開かれる義分を知る爲に文を抄出すれば左の如し。『止觀大意』第一觀不思議境を明し已つて、次に

中根未曉更修下法。二起慈悲心者(眞正發菩提心のこゝ)觀境不悟須加發心此人無始已起弘誓故(「華論」云下發心僧那(鏡甲と譯す)於始心終大起以赴難者弘誓也、赴難者入惡也(惡道)。今由觀境(第一觀不思議境)不契於理(重須發誓)於靜心中思惟彼我二痛自他無量劫來沈廻生死纏發小志迷菩提心、我今雖知行由未備故(重發誓言)衆生無邊誓願生死即涅槃故煩惱無數誓願斷煩惱即菩提故)法門無盡誓願知即惑成(スルカ)智故(佛道無上誓願)成(即)生(成)滅(故)作(此)思惟(豁然)大(悟)冥(所)照(境)入(凡)聖(位)等

此の中に我今雖知とは一心三觀三千三諦の妙解の開かれたことをいふ。次に行由未備とは一心三觀の實修實行が成就せぬといふこと。是によりて此に發菩提心四弘誓願の行願を起すといふことである。之を源信和尚の上に見るに『往生要集』には正修念佛門は天親の『淨土論』に依つて五念門を開きその第三作願門は全くこの發菩提心を勧められてある。但し彼の書は『止觀』の五略の發大心の文に依り。此書は十乘觀法の第二眞正發心に依る、依文に於て五略と十廣の別はあれども、意は全く圓教の發心に異りはない。

○眞正發心の意義。次に文を解さば、眞正發菩提心とは『弘決』五之三三に釋がある、意を取つて述べん。圓頓一乘の發心なれば、方便に簡んで眞といひ、三諦の理に依るものなれば正といふ。菩提は道と翻する、所期の佛果と見れば果道。行者の能行能趣とすれば因道、三諦の理を所觀の境とし、所行の路として、吾人の心は能行能趣と見る、それが所期の果に趣き向ふ相が發の字の意である。但し發には二つの意がある、一には今まで妄我の心に欺かれて居たものが善知識の教に隨ひて初めて迷に背くやうになつたのが發心、又それと同時に上求下化の方へ心を制し行く所を發心といふ消極と積極の二面と知ればよい。喩へば三十石の夜船で大阪へ向ふ。方角を誤つて居たためにどうやら京都へ歸るやうに思ふ。久しく心配をして居たものが己が信すべき人に教へられて。これがこの儘大阪へ下る道である。この氣の付いた時にはや京都へ脊を向けて居たのである。又それ

と同時に若しや己と同じやうに誤つたものはあるまいか、あらば知らせてやりたいの意を發したと思へ。大阪は所期の果、菩提に喩へ、夜船は所行の路、三諦の妙境即ち法性の理に喩へ、能行能趣は吾人の心、方角を誤つたは妄我の迷に喩ふ。心配をしたとは生死の苦果。そのまゝとは無明即法性、氣の付いたは發心、此に二つ、一は京都へ背を向けたは迷に逆らふ意。一は己と同じく迷ふものを救はんといふは上求下化の意。此にて粗々眞正發菩提心の意義も知られよう。

次に往生極樂業因等とは、『往生要集』では上末（今と同じく）『安樂集』を引く。『安樂集』は第二大門の中に三番の料簡のある中、第一發菩提心を明す下に出づ（上引）。引大經等。引とあれども文を引くにあらず、只大經云とあるによりてかくはのたまふならん。『大經』は康僧鎧譯の『無量壽經』にして、三輩段に菩提心を往生の業因と爲す。

二 止觀を引て圓頓の菩提心の義を明す。

（首書本七左）

若爾云何發之耶。『止觀』云、○發眞正菩提心者、○既深識不思議境、知一苦一切苦、（一）自悲昔苦。起惑耽湎、麁弊色聲、從身口意作不善業、輪環惡趣、嬰諸熱惱、身苦心苦而自毀傷。（二）而今還以愛

蠶自纏、癡燈所害、百千萬劫一何痛哉。（三）設使欲捨三途、欣五戒十善、相心修福、如市易博換、翻吏益罪、似魚入筍、口蛾赴燈中。狂計邪黠、逾迷逾遠。○自惟若此。悲他亦然。○即起大悲、興兩誓願。衆生無邊誓願度、煩惱無邊誓願斷。衆生雖如虛空、誓度如空之衆生。○雖知煩惱無所有、誓斷無所有之煩惱。○雖知衆生數甚多、而度甚多之衆生。○雖知煩惱無邊底、而斷無邊底之煩惱。○雖知衆生如如佛如、而度如佛如之衆生。○雖知煩惱如實相、而斷如實相之煩惱。○何者、若但拔苦因、不拔苦果、此誓雜毒故、須觀空。○若偏觀空、則不見衆生可度、是名著空者。○諸佛所不化。○若偏見衆生可度、即墮愛見大悲、非解脫道。○今則非毒非偽、故名爲眞。○非空邊、非有邊、故名爲正。○如鳥飛空、終不住空、雖不住空、跡不可尋。○雖空而度、雖度而空。是故誓與虛空共闢。故名眞正發菩提心。

○眞正發心の意義

即此意也。○^(一)又識不思議心一樂心一切樂心。^(二)我及衆生昔雖求樂不知樂因。如執瓦礫謂如意珠、妄指螢光呼爲日月。今方始解。○^(三)故起大悲、興兩誓願。謂法門無量誓願知、無上佛道誓願成。雖知法門永寂如空、誓願修行永寂。雖知菩提無所有、無所有中吾故求之。雖知法門如空、無所有、誓願畫續莊嚴虛空。雖知佛道非能成所成、如虛空中種樹使得花菓。雖知法門及佛果非修非不修、非證非得、以無所證得而證而得。○^(四)是名非僞非毒名爲眞、非空非見愛名爲正。○^(五)如此慈悲誓願、與不思議境界智、非前後同時俱起。慈悲即智慧、智慧即慈悲。無緣無念普覆一切、任運拔苦自然與樂。○^(六)不同毒害、不同但空、不同愛見、是名眞正發心、菩提義云云。圓菩提心其義如是。

○發菩提心的内容。この「止觀」の文は五之三^(一)より五之四初にかゝる、十乘觀法の第二眞正發

菩提心又は起慈悲心といふを釋する一段の文に依る。その中途、迷遠の下には十句四十字を略し、悲他亦然の下には十三句五十二字を省く。餘は全く「止觀」の文のまゝである、この文意肝要である。試に細科を分つ。

文三段

初、標

發眞

次、釋(11)

初、悲心を起す(11)

一、弘誓を興すの由を明す(11)

(一) 前の妙境の解を擧ぐ……………既深

(二) 境に展れて思惟す(11)

- (1) 過去の起惑流轉を思ふ……………自悲
 - (2) 今世の癡愛纏縛を惟ふ……………而今
 - (3) 未來の修福無功を察す……………設使
- 一、自ら悲しむ(三)
- 二、他を悲しむ……………自惟

○發菩提心の内容

- 「二、正しく弘誓を興す(三)」
- (一) 弘誓の相を明す……………即起
- (二) 非を斥ふ……………何者
- (三) 真正を釋す(三)……………今則
- 次、慈心を起す(二)……………如鳥
- 一、弘誓を興すの由を明す(二)……………(1)法、(2)喻、(3)合、
……………雖空
- (一) 妙境の解を擧ぐ……………又識
- (二) 昔は知らず今始めて解す……………我及
- 二、正しく弘誓を興す(二)……………
- (一) 弘誓を擧げ相を釋す……………故起
- (二) 非を斥ひ真正を顯はす……………是名
- 後、結(二)……………如此
- (一) 境智を結會す……………不同
- (二) 非を簡び正を結す……………

この科に照して文意を見らるべし。但し少しく要點を述べれば文は標釋結の三段と見る、その釋の

中、拔苦の悲心と與樂の慈心に分かる、それは菩提心は拔苦與樂の慈悲より起るからのことである。その慈悲は亦自利と利他に通ず、即ち上求菩提の願作佛心と下化衆生の度衆生心とである。今この觀行者にこの慈悲心の起るのは何故かといふに、是に二つ、一は上の觀不思議境に於て既に一苦一切苦、一樂一切樂の妙解を開いたので、吾人現前一念の苦樂は實に是れ盡三世遍法界の苦樂である。と知つた、それ故に苦を抜き樂を興へたいの慈悲心は起る。又一つには自己の過去の起惑と流轉を思ふ、又現在の愚癡や貪愛にほだされてあることを思ふ。そして未來の修福に就ては、たとひ人天の五戒十善を行せんとしても皆是れ煩惱の賊に害せられて、何等の功のなきことを知つた。是に於て衆生は無邊なれども皆悉く度脱せしめんと願す。自己の煩惱は無數なれども皆斷し盡さんと誓ふ。又一面を願れば佛性の如意珠を失ふて凡情の瓦礫を喜び。本覺の月を見ずして妄我の螢を樂んで居たことであると知つた。此に法門は無量なれども盡く知らんことを願ひ無上の佛道は達し難けれど達すべきの道あるを知つて之を成就せんことを誓ふかくて此の誓願は前三教偏權の誓願ではない、妙解によりて立てし妙行は不思議の理諦と圓融の觀智とに相即し相應するものなれば、之を真正なる發菩提心と名ける。即ち是れが圓頓行者の起慈悲心であるといふ意。起惑は無始無明の妄我顛倒を起點として惑業の絶わざる相をいふ。耽湎はフケリオボル、こと。魚は妙に對し、弊は弊惡と

○發菩提心の内容

熟す。嬰の字「止觀」には、繁に作る、何れもカ、ルと訓む。葛蔓のまつはりかゝる貌。愛、墮、癡、蛾は前の第六章六計に出づ。欲捨、三途とは捨は離るゝこと、此の三途の語によりて上の段の惡趣とあるを三惡道と見、又此下を五戒、十善の語によりて人天と見るが「弘決」の科文の意である。今の科は分り易く總てを三世に分つ。相心は有相分別の慮知といふこと。ワザトらしき心、爲にする所ある心、それを相心といふ。親の子を愛する慈悲も、若し年老いて樂をせん爲とか、仕方がない嗚呼せば子は育てねばならぬなど、能く人の戯れにいふことなれども、戲言決して實ならざるにあらず。是れ恐くば有相作意の心なるべし、有相心の慈愛は畢竟自己中心の弊に陷る。教化に従ふものは大に注意すべきことである。自己中心は親孝行も子を愛するも俱に物の賣買思想になる、次の文に、市易博換の如しといふは適切な喩である。又その結果は魚が餌の爲に筍に入り、蛾が火を取る爲に身を焼かるゝが如しと喩へらる。譬むべきは自己中心の有相慈善である。狂計、邪、點、逾、迷、逾、遠の語を味ふべきである。點は慧也、通常はよき智慧にも用ふれど、今はワルガシキをいふ。遠しとは眞理に遠ざかること。煩惱無邊は「止觀」は無數に作る、和尚の所覽は邊か。次の文には、無邊底といふ。さればこのまゝにてもよし。雖、如虛空の下は有相を離れた無相の悲心より與る弘誓なれば、自ら三諦の理に稱ふことを示す。初の度斷一雙は空觀の誓相、次の一雙は假觀の誓相、次の一雙は中道觀の誓相

と、三雙六句に布衍せらる。何者の下は前三教の菩薩の誓願を簡ぶ。三藏教の菩薩は、伏惑行因といふて見思の惑を伏して大悲を行す。それ故に苦の因は除きたりともいはるゝが、未だ三界を離れざる故に苦の果は拔けぬ、それ故に有漏雜毒の心を以て與す度衆生の弘誓なれば、更に空觀を須ひねばならぬといふ意。さればとて、通教の菩薩の如く偏眞但空では度すべき衆生なしと見るからそれは著空者となり了るであらう。かくの如きは諸佛も教化し難しとする所（諸佛所不見は「中論」の語）。さりとは亦偏に衆生の度すべき方面ばかりを見るもの即ち別教の地前の菩薩や又は通教の出假の菩薩は却て作意分別有相の見到に墮する。畢竟何れも無明の分域の人々にて眞の解脱者ではない。今いふ弘誓は有漏雜毒にあらず、二乘凡夫の有相の僞善にあらず。中道眞實の正しき發菩提心であるといふ意。鳥飛空の喩の意は、鳥が虚空を飛ぶといへば虚空なれば跡がないでないかといふに、否、鳥は虚空の何もないといふことに住着（執著）せぬから、虚空に飛ぶの跡があるのである。此は空に即して假なることをいふ。次に鳥は空に住着せず、往來はありといふならば鳥の跡が永く空に掛るかといふに、否、鳥飛んで跡は尋ねべからず、此は假に即して空なるをいふ。「一聲は月が啼いたか時鳥」聲を聞いた、月を見たといふは空に住著せぬ相、されど月と聲の外はない、鳥の影を見ぬといふのは跡尋ねべからざるの相。そこに亦有亦空非有非空の中道は自ら見ゆる。誓與三虚空

共闘とは面白き文字である。「大品般若經」二十一に出づといふ、文末檢せず。吾人も生涯を期して虚空と奮闘する覺悟を有りたい。瓦礫如意珠の喩は首書に引く「涅槃經」を参照せられたい。雖知の三雙六句は前の悲心の下の如く空假中三觀の相。續の字は字書に、書也繪と同じといふ。虚空に樹を種うるの喩は、「思益經」二八(卅藏十套三、二三七)に出づる。

非偽非毒は前三教の菩薩は未だ中道を證らざる故に通して毒といひ、又二乗は大悲なく凡夫は生死を出でざる故に、通じて偽といふ。又非空非愛見とは藏通二教の二乗と通別二教の入空の菩薩を空といひ、前三教出假の菩薩を見愛といふ。彼等は未だ中道の應本なき故に見思の惑、及び習氣に依りて利生するからのことである。今、圓教の行者は初發心より常に中道を觀す。中道の偏を離れて偏に應ずるの徳を以て衆生濟度の根本とする。之を中道の應本といふ。これあるが故に真正といふのである。次に如此慈悲誓願等の下は此一段の結釋である。但し此文の初の處は、科文に境智を結合すとして置いた。その意は此の眞正發心の慈悲誓願と、前の觀不思議境即ち境は圓融三諦の妙境、觀は一心三觀の妙智、その境と智とに關係の親しき所を擧げて、兩者を結び合はせるが此下の所詮であるといふこと。但し、此書にあつては何れでも圓融三諦といふは、皆阿彌陀三諦のこと、心得てをらねばならぬ。それでないといふ一部全體の意のある所が解らなくなる。又この文の中、先づ

誓願と境智と相即することを、前に、あらず後に、あらず同時に俱に起るといふ。その義を次に慈悲即智慧といふ。此の智は即ち解了のこと、教を聞いて圓融三諦阿彌陀の妙境が解了せらるゝによつて智解が生じたのである。又一即一切、一苦一切苦若しくは一樂一切樂、十界十如は一心の本具、凡聖本是れ一如などの智解が生ずるから。卑屈の念も起らず上慢の弊にも陥らずに。自分も菩提を求め他の衆生をも救はんといふ慈悲誓願が起るのである。此の場合に義をいへば、妙境は所縁で誓願は能縁である。されど圓頓の智識では、能所は一體の義分と解了する。是に於て能縁にわざとらしき作意縁念の分別もなく、所縁に固定的の善惡差別の想を浮べぬ即ち無縁の慈悲を以て不思議の境に對する、是の故に境を無縁といひ、慈悲誓願を無念といふ。無念の念を以て無縁の縁を照し、能所全く無能無所の光景である。さればこそ十方法界に覆ひて任運無作に自由に平等に拔苦與樂を行することが出来るといふのである。今日の思想界も此まで徹底すれば邪道には陥らぬが、生兵法は大傷のもと無相却て有相、平等も反て惡差別ではなからうか。

次に不同害毒等の文は前來の所明を按へて、是故に前三教の二乘菩薩及び六道の凡夫の心相とは異なる。之を眞正發菩提心といふと結ぶ意。毒害は凡夫と三藏教の菩薩。但空は藏通二教の二乗及び鈍の菩薩。愛見は前三教出假の菩薩を通じて指す。具さには前に出づる通りである。

三 開會の意を以て菩提心の義を助釋す(三節)。

一、心を開すれば境自ら妙なるの義に約す(三三)。

(一)、正しく明す。

(首書本五八)

又以開會意重而助釋之。識不思議境而發菩提心、一切諸法悉是佛法。但開其心、無境不轉之故也。是以望南樓秋月、可到眞如之本宮。翫金谷春花、將還寂光之理土。立圓頓行人、觀造境即中、不見一法出法性者。誠秘密奧藏、圓極冲微者。迷悟躰一修性不二。於修照性、煩惱即菩提。以性了修、生死即涅槃而已。凡繫緣法界、一念法界。一色一香無非中道。己界及佛界衆生界亦然。陰入皆如、無苦可捨。無明塵勞即是菩提、無集可斷。邊邪皆中正、無道可修。生死即涅槃、無滅可證。無苦無集故無世間。無道無滅故無出世間。純一實相、實相外更無別法。法

性寂然名止寂而常照名觀 雖言初後、無一無別

○開會の發心生活と圓頓止觀已下の一段は科に示す如く、一乘開會の意を以て前にいふ如き境智相應の發菩提心を助釋するのである。但し開會といふは分り易くいへば、トリ直スことである、二乗が成佛はならぬと堅く心に轉を著けて居たを、『法華經』にて汝等所行是菩薩道と、情の封を解き迷の蓋を開いて、それがそのまま、成佛の道なりと開許され、今まで親を失ひ三界に流浪したものが、眞の佛子なりと父子の天性相關する所を結會ふたのが『法華經』の二乘開會である。それは教相、今は觀心の上でいふ、吾人は一切諸法を何と見た、無始已來生死の苦界に於ける責道具と見た、されど教に由りて情の蓋が開かれて見ると、法の本有の眞性が知られて一切諸法皆是れ佛法と達觀する。是に於て更に批判して見る。何か變つたものがあるか、實は法既本妙、能由物情であるから、何も變つたものはない、法の轉する理由がない。けれども心の情が開會さるゝと、境も亦自ら妙となるから、そこに總じていへば心境並び開するの意もある。今和尚はその意にて先初にその開會を以て菩提心を助釋せんと標示せらる。之をとは十乘觀法の第一觀不思議境即ち妙境と妙智とに相應する圓頓の菩提心を之と指したのである。仍つて次に不思議境を識つてといふ語を下だし、更に一切

○開會の發心生活と圓頓止觀

悉く佛法と開會の意を示し。次に但開ニ其心無境トシテ不轉セカ故にと結ぶ。この二句八字は前來
 いふ如く開會の義を釋したる『法華文句記』十二の文を用ひたのである。次には更にこの開會を
 月を視、花を弄ぶに形容して教へらる。「醉ひさめて見れば花なり月夜なり」(知、證)世間に鬼は一人
 もない、(度)「盜人を捕へて見れば吾子なり」(斷)それが圓頓行者の發心生活の光景である。立圓頓
 行人以下は『止觀』の圓頓章に依つて發心生活の心地を開演したものである。圓頓章は章安か天台
 の『止觀』を記録せんとするに當り、圓頓止觀の主旨を叙べたものである。『止觀』は會本一之二に
 に出づ。今の文をその原文に對照するに彼れの初四句十五字を今の文にはこの立圓頓以下四十七字
 に敷衍せられてある、其餘は圓頓章の全文である。左に本文を掲げ、私に試に科釋を作りて文の上
 に係け、一覽に便ならしめんと思ふ。

(試に科釋を作る)

(圓頓章の原文)

約二止觀
 所緣妙境
 初心ヨリ直ニ照ニ本有ノ理ヲ……………圓頓者初ヨリ緣ニ實相ヲ
 陰入事境ノ當相即中道實相ノ理ナリ……………造レ境ニ即中無レ不ニ眞實ナリ
 能緣ノ止觀ハ同ニ依ルカ法界ニ故ニ絶ニ對待……………繫ニ緣ヲ法界ニ一ニシテ念ヲ法界ニ
 能緣觀智
 情見ノ事物ハ其體即法界ノ理ナリ……………一色一香無レ非ニ中道ニ

釋

約二四諦

結

例ニシテ色香中道ニ示ス三法ハ一念ノ理具ナルコトヲ……………己界及佛界衆生界モ亦然
 以レ無ニ迷悟修證ノ可レ論ス釋ニ無作四諦……………陰入皆如ナレハ無ニ苦ノ可レ捨ツ
 無明塵勞即是レ菩提ナレハ無集
 可レ斷ス邊邪皆中正ナレハ無ニ道ノ
 可レ修ス生死即涅槃ナレハ無ニ滅ノ
 可レ證ス
 以レ唯住ニ法ノ本有ニ結ニ圓頓ノ行ヲ……………無レ苦無レ集故無ニ世間ニ無レ道
 無レ滅故無ニ出世間ニ純一實
 相ニ實相ノ外更無ニ別法ニ
 法性寂然ナルヲ名レ止寂ニシテ而
 常ニ照ナルヲ名レ觀ト
 舉ニ寂照ニ釋ニ止觀ヲ……………雖言ニ初後ニ無レニ無レ別是
 以レ修性不二ニ結ニ圓頓ノ觀ヲ……………名ニ圓頓止觀ト

更に此書に對照して大意を述べんに、先づ此文が止觀と四諦とに分かる。即ち止觀の行願を擧げた

○開會の發心生活と圓頓止觀

ものである。止觀は觀行にして四諦は四弘誓願の所依である。止觀に亦境智の二つがある。境は所縁の妙境、智は能縁の妙觀。その所縁の妙境を釋するに、圓頓章には四句を開く。此は圓頓初心の行者が僅に圓聞の耳に歷れしといふ程の、低級なる智識(名字即)にて、宿緣芽出度、諸法實相の大乗の原理を聞き、直ちに本覺の理性を觀するといふ。その本覺の理性なるものは十界三千の性相を具へて、一即一切 一切即一、誠に不可思議なるものなれば、之を妙境と名ける。その妙境に心を推し向ければ(造)その妙境には吾人凡夫の思ふ佛には有るが吾人には無いといふやうな、偏情虛妄の相は少しもなく。五陰も十二入も一事一物皆是れ迷悟體一、中正眞實の妙境と知らるゝ。此書には之を布衍して圓頓の行を立つる人は境に造れば即ち中と觀達し看よ、さすれば萬有界が一法として實相にあらざるものはないことになる。誠に此は三世諸佛の秘奧圓頓至極の深微なるものであるといふて。更に次の段に出ださんとする二種相即を擧げ、修性不二を以て此の一段を結ぶ。次に繫緣法界以下は文全く圓頓章に同じ。即ちこの四句は前の所縁の妙境に對する能縁の觀智を明す。その意は觀智には止と觀とがある。止は即ち寂の義、靜の義、觀は照の義、明の義、此は消極積極に喩へる。消積の兩極は離るべからざるが如く、止の寂は常に觀の照に離れず、動の積極は常に消極の靜であらねばならぬ。是の意を以て此文を見るに、能縁の觀智を法界に繫け止むれば法界は總て

寂靜。又能縁の觀念を法界に齊しうすれば、法界の全面は洞朗となる。「咲く時も散る時もよき櫻かな」止觀靜明同じく是れ一法界の理の外はない。されば吾人の情の見取る所は色がよいの香がよいのご隔歴の執著をつけるが、執著の一つ／＼事物の當體は皆是れ虛妄の情相を離れて色香自ら中正として眞實ならざるものはない。次にこの『大品般若』の色、香、中道の文に例して、『華嚴』の三無差別も亦是れ吾人一念の心具の外はなしと決し。それを(哲學)端緒として、次の四諦(宗教)の無作觀を述べて、苦集滅道、世間といひ出世といふも實は法體には迷悟修證の論すべきものなしと體達せよ。かくの如く法の本有にゆりすはりのつづのが圓頓止觀の修行といふものと結ぶ。その意は終日上求菩薩するも菩提の跡なく、生涯慈悲を行じて、少しも度生の相を認めぬといふ意。此が今の開會の發菩提心の生活状態であるといふ意。次の文は止觀を寂照に配對して、更に修性不二を以て圓頓止觀を結び、前の段に修の處に性を照して煩惱即菩提といひ、性を以て修を了して生死即涅槃といふ」といふたに應ずる。誠に和尚の釋文の嚴密にして極めて含蓄なるに驚かざるを得ぬ。

(二)、二種相即に對する斷惑證理の疑を釋す。

(首書本六五)

問、煩惱即菩提生死即涅槃無二無別者、不可斷惑證理。若爾同

大乘上慢見乎。答、法性寂然之故、生死涅槃理性無二、寂而常照之故、五住二死嘗無混濫。得止觀解除能障惑、是則斷惑證理也。只翻邪執、躰達諸法。「止觀」云、止能寂諸法、如灸病得穴、衆患悉除。觀能照理。如得珠玉、衆寶皆獲云云。今止觀並存。不可墮上慢。眞如淨心寂而照理之日、隨染淨緣、故成六凡四聖。「大乘止觀」云、譬如見金蛇、知是打金作、即解於蛇、躰純是調柔金、復念金隨匠得作蛇虫形、即知蛇躰金隨匠成佛像。藏心如眞金。具足違順性。能隨染淨業、顯現凡聖果。以此因緣、故速習無漏業、熏於清淨心、疾成平等德。是故於即時莫輕御自身。亦勿賤於他。終俱成佛故云云。心體自性清淨、染業熏習被覆。所以六道心相被汚。故心性眞金異形色。今隨順諸佛金匠教、欲顯自心調柔、金不可依功德性之不顯而輕自身賤他人。鏡本明淨、塵積故闇。

以闇故不賤鏡。磨之時得明故。是以繫想於心鏡、明而可拂煩惱。客塵也。

○煩惱即菩提と斷惑證理の關係、煩惱即菩提生死即涅槃は諸大乘經の通説。無論取意の文なれども、その尤も近きは「思益經」一三(尸藏十套二、二三五)に煩惱中有菩提、菩提中有煩惱。同二(同二三六)に生死是涅槃無退無生故涅槃是生死以貪着故とある文にして、天台一家には之を二種相即依憑の文とする。

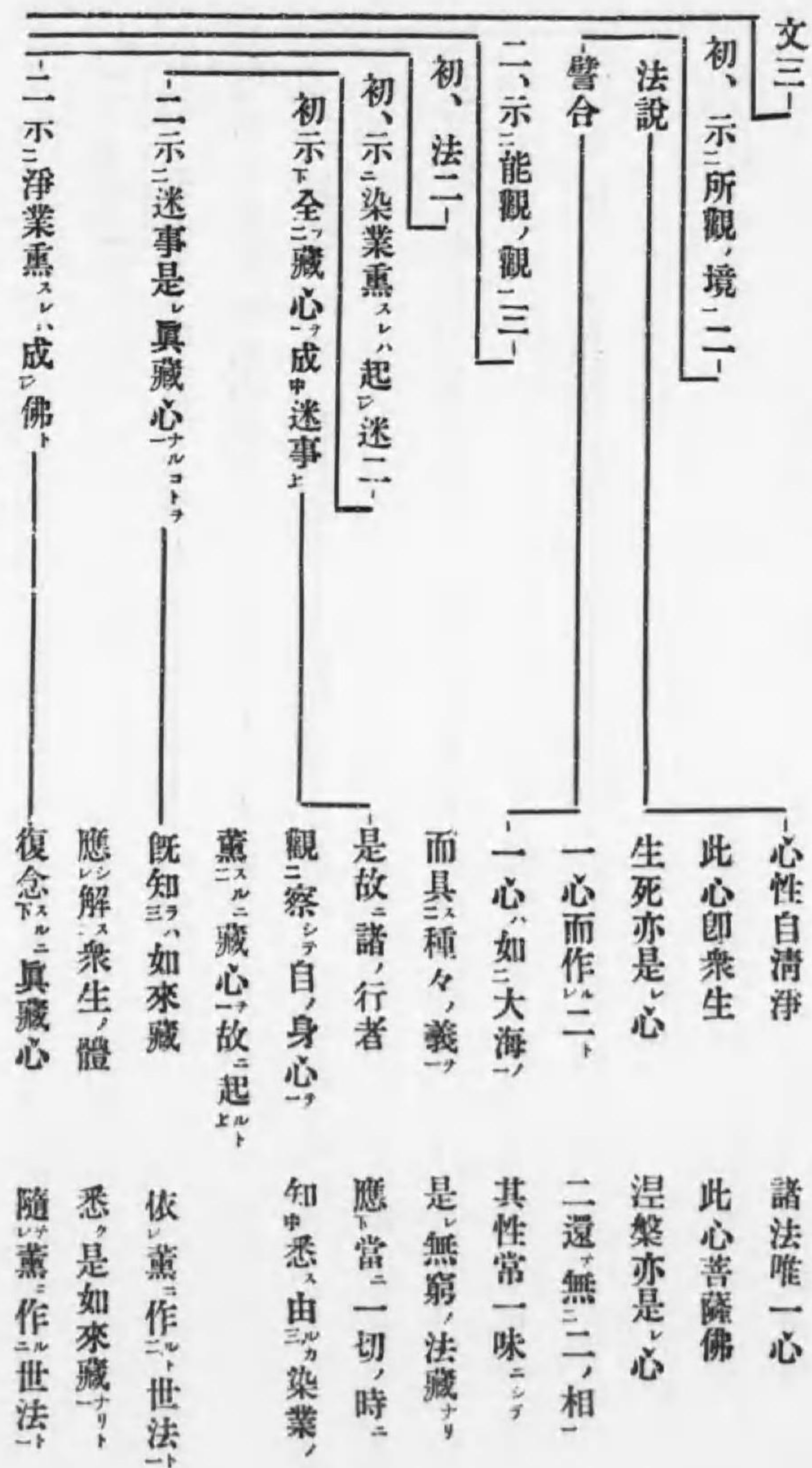
問煩惱即菩提等、この問答は前の段に孕まれたるもの、前の段には圓の菩提心開會の意を釋するに、圓頓章を用ふ。中に止觀に約すると四諦に約すると二つがある。今この問答は無作の四諦に依りて疑問を立て、止觀の意義によりて解答を與へる。即ち無作の四諦は煩惱即菩提なれば集の斷すべきなし。生死即涅槃なれば苦の衆生の度すべきものなしとなる。随つて證すべき滅もなければ修すべき道もないといふことになる。それでは今の菩提心の誓願の興るべき由緒が缺ける。即ち開禪者流の即心是佛動かすして即ち到る、修習を加へずして便ち正覺を成すといふ如き大乘の増上慢を出ださんかといふが疑問。此に對する解答は、今の文に得止觀解除能障惑等とある。止の故に

無作、觀の故に修證といふ是れがその要點である。之を證するに『止觀』を引き、更に斷惑證理は即ち是れ眞如隨緣の作用なりといふに就て『大乘止觀』を引く。終りに自屈の弊に陥らざるやう、慧に修行を勧めたのがこの一段である。

次に文に就て見るに法性寂然も寂而常照も前の圓頓章の文である。前者は奢摩他の妙止後者は毗鉢舍那の妙觀、前者は散亂の心を對治するもの、これは生死即涅槃の理性平等の方を顯はす。修行の上では消極的無作の意義となる。後者は昏沈の心を退治する。即ち修行の上の積極的斷惑證理の四諦の方面を顯はすもの。この兩方面の止と觀との意義を知りて見れば、終日度斷知成じて終日迷悟凡聖の隔てを見ぬといふが無作の圓行である。即ち眞實の一灸穴を得て衆病を治し、一如意珠王を獲て衆寶皆備はるといふが如きものである。引用の『止觀』は三之三三三に出づ、『止觀』では珠玉は珠玉に作る。如意珠王のこと。次に今止觀の下は前來を承けて後を起す。淨心寂は妙止。照理は妙觀、而の字、日の字を以て常寂常照を意味する。眞如隨緣の義を知れば、十界宛然として六凡四聖の迷悟を見る。迷悟の義ありて、上慢に流れず、迷悟一如の義ありて自屈に陥らぬその旨次の『大乘止觀』に出づ。

○大乘止觀頌の科釋此大乘止觀云の文は下卷に出づる頌文にして、凡そ四十五句あり。今はその中二十句を引く、(正藏三十二套九、三十九)『釋要』では第四卷(續藏貳編三套五、四七八)。此の頌

には妙立師の『大乘止觀頌註』なるものあり、石川了因講師曾て細科を補はる、心得易し。今頌文と併せて科を録出し以て講辨に代ふる。



○煩惱即菩提と斷惑證理の關係

若以淨業熏

藏必作佛果

(已下今の書に引用せらる)

二、譬三

初、全藏心成迷事譬

譬如見金蛇

知是打金作

二、迷事是真藏心譬

即解於蛇體

純是調柔金

三、淨業熏成佛果譬

復念金隨匠

得作蛇蟲形

即知蛇體金

隨匠成佛像

三、合

藏心如真金

具足違順性

能隨染淨業

顯現凡聖果

以是因緣故

速習無漏業

熏於清淨心

疾成平等德

是故於即時

莫輕御自身

亦勿賤於他

終俱成佛故

此文の中、心性とは前に論じたる如く、心は不變隨縁の事、吾人のこの心、性は隨縁不變の理、本覺法性の體、前者を水に喩ふれば、後者は濕性に當る。この一心の眞體は水の清みても濁りても濕性

の變せざるが如く、心性は自體清淨なりといふ意。唯一心とは染淨唯一といふこと、前に出づる『華嚴經』の三界唯一心の意。下に作二といひ無二相といふはこの一心が染縁に隨へば世間の一切法となり、淨縁がかゝれば出世間の一切法となる。されどその縁起のまゝ、全く不變の一性といふことにて無二相といふ。一切時とは隨意三昧は色聲香味觸法の六受、行住坐臥語默作々の六作に涉りて、何時にても止觀を修するをいふ、觀察、自身心は所謂修觀の次第は必ず内心を先きとすべし之意。染業は三界の生死を招く有漏業のこと、藏心とは次に出づる、如來藏、如來藏とは如は不變の性來は隨縁の心、それを吾人のこの心に含藏し居ると心得ればよし。熏は薰習、衣服に香氣を薫じつける如し。世法は三界生死の果報。今取詰めていへば吾人の迷の身心をいふと見よといふ意。眞藏心とは妙立師の講辨に、如來藏には別に眞心が惑に覆はれて居るから如來藏と名くといふ釋がある(別教)。今は(圓教)それに簡別せん爲に眞の字を附すとある。藏、必作佛果とは如來藏心が經卷知識によつて無漏業に熏習さるれば必ず佛果を成するといふ意。これまでは此書に引用はない、次の譬の文以下は此書に引く。調柔金は金塊と思へばよし、金蛇は自身に喩へ、打作は染熏に喩へ、調柔金は如來藏に喩へ、隨匠成佛、像は淨熏によりて淨法身を得るに喩ふ、但し此の匠は今止觀法門に喩ふ。藏心、如真金の下は略して前の法說譬說を帖合する。具足、違順性とは金塊は蛇ともなり佛像

ともなる。迷ともなり悟にもなるべき性を、如來藏即ちこの吾人の心性に具足すといふ。「傀儡師首にかけたる人形箱、佛出さうと鬼を出さうと」の如し。以是因緣故等は止觀を修することを勧むる一段である。因は違順の性、緣は染淨の業。無漏業は淨緣、清淨心は淨因。平等徳とは涅槃の淨果是故於即時とは正しく凡聖一如の故に自他身を輕んじ使うな（御は使也）とは自屈の心を引き興したまふ意「梵網經」に汝は是當成佛我は是已成佛當作ニ如レ是信とあるもこの意。又「法華經」の不輕菩薩の人を常に禮拜して輕賤せずといふも亦この意。同發菩提心の本づく所は實に此にあることを知らしめたまふか。（「大乘止觀」に眞偽の論あり今は略す）次に鏡、本明淨、等と鏡と塵の喩はこの「大乘止觀」の勸修の一段を承けて、次の問答を起す爲の聯鑣に用ひらる、誠に巧妙といふべし。

(三)、常寂常照に對する欣淨發心の疑を釋す(二)。

(一)、正しく三身三寶に約して示す。

(首書本八十一)

問、何故強欲顯心性法身耶。答、欲顯法身理、爲得般若解脫徳也。譬如磨鏡得明寫影也。磨法身鏡、爲得報身智慧明也。要智慧明者、爲寫應用影也。性徳三身備我身内、如未磨鏡有明像性。

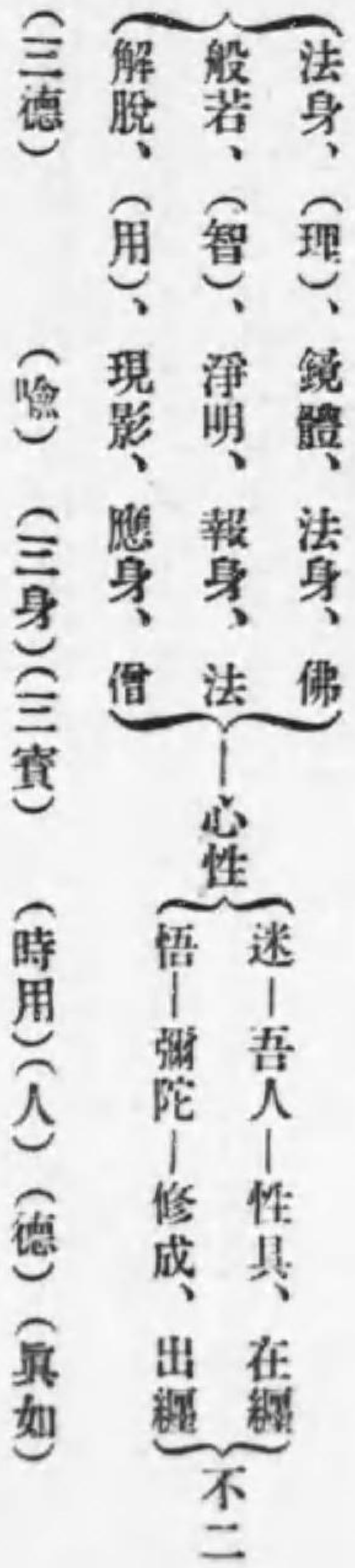
而彌陀如明鏡、修顯之故。衆生如闇鏡、性具之故。明闇雖異鏡性惟同。悟之名出纏眞如、迷之名在纏眞如。迷悟是時用差別心性而常不二也。故恒沙果徳可求我心中。是以經曰、無邊徳海本圓滿。還我頂禮心、諸佛云云。具如上引之。眞言宗、四重曼陀羅。三十七尊、從因至果、從本垂迹之儀式准前後、知可之。不知貧女家有無量伏藏。日夜數他寶自無半錢分。故念彌陀色相莊嚴、方可觀與我心無別。夫能念所念性空寂。不二而一難思議。我此心性如帝珠、三寶影現我心中。其三寶者心鉢覺知名佛、心體離染名法、心體無諍名僧。是一體三寶也。凡聖始終此三具足。三寶亦有三種、別相三寶、住持三寶、一體三寶也。一體、別相住持功一體耳。念一體、三寶心性如帝珠、釋迦彌陀等悉現入我心同一無一一也。

(四)、宿善と善知識を擧げて誠易す。

我等依何宿習、今聞此深妙法乎。若爲利養、若以輕戲、緣心性理、功德甚多。無量無數却是法甚難聞、猶如優曇華時、時乃一現。爲利爲戲、功尚如是。何況發心真正、爲上求下化乎。若非緣正境、縱無妄僞、心勇猛精進行、尚難成佛種。但攀附枝葉、捨其根本、無眞實念佛之志、不欲悟法華之人、若聞此旨、定致誹謗。非同志輩、能可秘之。深奧法門、言近意遠。自非遇善知識而常談話、恒不馴心、恒難悟入。故妙樂大師云、若依之修行、咸須口決云云。又「弘決」云、四緣雖具、開導由師云云。四緣者、止觀行者、具五緣中、其四也。閑居靜處。四息諸緣務、五得善知識。五緣者、一持戒清淨、二衣食具足、三心也。開導由師、二者教授、善知識。耳。自習而可知。非外人所測。發菩提心、緣無過善知識耳。

○常寂常照と欣淨發心。前段に於て大乘教原理の二種相即と四弘誓願の斷惑證理と、矛盾のあることを問題として、それを止觀の常寂常照によつて解決をした。今此一段は常寂常照であるならば、

欣淨も發心も要なかるべしといふ疑を立て、それを解決する。その要旨は吾人は本來、佛に相違はないが性徳の佛である。彌陀佛は性徳を全ふじた修徳顯現の佛である、喩へば彌陀は金箔押した佛吾人は素法身木阿彌といふ貌である。しかし素法身といへば或は却て尊むべく思はれるが、利尚はそれを今此書に喩へて、彌陀は磨ぎ上げの明鏡、吾人は塵垢の積りし闇鏡といはる。されば要は彌陀と同じく光り耀く佛にならんとして此に發心し欣淨するといふのである。尤も彌陀は修徳顯現の佛といへども、吾人心性の外の佛ではない。それ故に阿彌陀の三身は吾人の心内に求めよ、本と是れ一體の三寶なれば。吾人心性の中に顯現することを知らねばならぬ。是れ此の段の初の一節に教ふる處。左圖參照せられたし。



文は大之を以て解さるべし。經曰とは第五章に出づる「蓮華三昧經」の文、(第二編論要一九頁參照)貧女伏藏の喩は「涅槃經」如來性品八如に出づ(七藏五十六套五、四六五)天台常に六即の喩に

用ふ。「知らざるを(理)知りて(名字)掘りつゝ、(觀行)近きて(相似)開きて(分真)元との寶をぞ取る(究竟)」といふにて知らる。數他、寶の喩は『華嚴經』に出づ。能念、所念等の七言四句は例時作法の伽陀に能く似てある、何れの經に出づるか、更にその道の人に問はんことを思ふ。後の我心、中は首書本には中我心に作る、今は單行本に依つて改む。三種、三寶のこと首書に委し、今本文の用ふる所は觀心の三寶なれば一體の三寶を擧ぐ。帝珠は帝釋天の羅網の飾の珠、互に相映して重々無盡なるをいふ。次の一節はこの深妙の法即ち眞實念佛の法に遇ふことを慶ぶべきを教へ、且つ自ら輕んじ他をして誹謗せしめざらんやうにと誠めらる。言々句句寔に金玉の聲ならずとせず、吾人の今日の時勢に處する用意としても、尙厚く崇仰すべきことである。妙樂、大師は荆溪尊者湛然の所住の寺號、後人寺號を取つて尊稱とす。今の文は『止觀大意』の終の文である。次の『弘決』は四之一五六の文。

○名利の善も尙勸むべき意義。此は『二百題』十二八三には名利善根といふ論題がある。凡て名聞利養の厭ふべきことは諸經論の通説、論師釋家の常に誡めたまふ所である。此書にも第一章廿には名利の習學は摩尼珠を牛一頭に買ふるが如しとある。然るに今の文には利養輕戲の聞法も尙且佛種を成ずるとある。此に就て『二百題』に引く諸文を見るに『弘決』四之三六三には殺賊者名利法師也、同九之三三三には飛狸是畜生名利是鬼界とある。又『法華玄義』三上一には邀名利一増見愛二等といふ、されど決擇

は名利戲論といへども、修する所の善根は其體本と妙なれば、成佛の功用決して空しからず。假令名利そのものは惡趣の因たりとも善根の力は終に菩提に赴くべしといふ意。此に就て依據の文に『楞嚴經』(『弘決』二之四二引く)を引く、恐くは今此書も此文に依りたまひしものであらう。その文を出せば、佛告堅意我滅度後五百歲多有比丘爲利養故發心出家以輕戲心聞是三昧發菩提我知是心亦得作菩提遠緣況清淨發心と尊とき文である。取り誤りてはならねども念佛三昧の法徳が味はるゝ。

二 種類種、相待種の義に約す。

(首書本九)

又復一乘開會之意有種類種、有相對種。若以種類種論之、彼戀愛妻子之癡愛即應化慈悲、世智三乘之解心亦報佛智慧、衆生皆有心是法身、如來也。又偏求有漏報、不志菩提者、造像起塔、低頭舉手、乃至一稱南無、如此過去微善、願智所擊、咸趣菩提。火焰向空、理數咸滅、水流趣海、法爾無停。但由願智未資、便封果報也。

○名利の善も尙勸むべき意義

「記」云、善體本妙隨執者心。是故開心宿善咸遂云云。今有塔寺運歩之人、多爲名聞利養故也。暫隨其世情、雖成淺近願、聞開會教、聞已諦思惟、善鉢眞善妙有、必到無上菩提。加之、以相對種論之、煩惱業苦、三道卽法身般若解脫三德也。不除其法鉢、只改其執情。「大乘止觀」云、但除其病而不除法云云。若於種類、若於相對、凡厥萬法、納心觀之、六道四生、併皆清淨如明鏡、上現善惡像、知鏡鉢已悉清潔耳。

○又の脈絡と開會發心の種別。此章は文の段落實に分ち難し、仍て今茲に前後の脈絡を一瞥せん。此章初の一段に菩提心は往生淨土の業因なることを明す。次にこの菩提心は圓頓の菩提心なれば境智卽一心三諦三觀と相應する旨を示す。次に一心三觀の菩提心なれば求むる菩提の佛果を遠い所に求むるのではない、所謂道は近きにあり、この自己現前の煩惱妄念の心、これかそのまゝ菩提の覺道であると。卽ち開會の義を以て圓頓の菩提心義を助釋せんとするのである。その開會釋が二重に

なつてある、その初は總じて心を開すれば境は自ら轉ずるといふ義を以て、煩惱卽菩提生死卽涅槃の義を説明する。それがこの次前の一段であつた。但し此に複雑してあるのは、この二種相卽に就て自然疑問が起る、それは相卽と斷惑證理の矛盾である、それを解決するに常寂の止と常照の觀を以て會釋する。此に亦疑問が起る、それは常寂常照ならば修行の發心のといふことは要らぬことではないかと、之を解決するに性德修德の差別あることを以てし、且つ吾人のこの深妙の法に遇へることを喜び、又知識に遇はずば發菩提心の成せざることを示さる。かくて此の段に來りては、更に重ねて開會の義を擧げて吾人平生の微善小事が皆是れ菩提に赴くの業因ならざるはなしと(種類種)又吾人の情執さへ除けば三道の法體卽三德なりと(相對種)いふを以て、この圓頓の菩提心を釋成するのである。以上は文の段落に就て大旨を述べたことである。

次に正しく文に就て辨じやう。先づ種種相對種といふは「法華文句」十九及その下の「記」に出づる。惠澄律師の講義には相對は迷悟敵對するもの故に法性の具德を顯はし、種類種は因果相從するもの故に法性の二なきを顯すとある。迷の三道を卽悟の三德と取り直すが相對種の開會、今の三對には法體を除かず執情を改めよとある、是れ煩惱も生死もその體法の具德であるからのことである。「文句」には「維摩經」の一切煩惱之儔爲如來種。又五無間皆生解脫相。又一切衆生卽涅

槃、相不可復滅の文を引く。皆是れ二種相即の意である。又種類種は凡夫の癡愛と三乗の智解と一切衆生の有心とを法報應及理智悲に配し因果相從して法性の上には凡聖迷悟の差別なしと開會するを種類種の開會といふ。

妻子癡愛—應身、悲—緣因佛性
三乘解心—報身、智—了因佛性 } 法性不二
衆生有心—法身、理—正因佛性
(所開凡聖) (能開佛身) (佛性)

之を『文句』に對照するに彼は此文の次に出づる造像、起塔、低頭、擧手の世智を擧げて、これを轉迷開悟の解脫の種類とし。三乗の解心を般若の種類。衆生の有心を法身の種類とする。三徳と三身は果體と具徳との相異にて、その體別なければ今此書は三身の果體に就く。但し世智を後に別出して、此に妻子の癡愛を出したのは、癡愛も尙世間人道の小善と見て、開會の意義を徹底せしむる爲に、かくはしたまふものならんか。但し據は前の相對種の下に出だす『維摩經』の一切煩惱之備、是れ如來の種なりとあるに據るか。又彼經に維摩居士は慈悲を以て妻女とすといふ文がある、此等に據りたまふか考ふべし。次に造像起塔等は人天の果報を求むる小善なれども、是皆成佛の道なり

と、緣因の佛性を以て開會せらるゝのが『法華經』の方便品である。それを今此に擧ぐるは、前にいふ如く、『文句』の釋に依つたものである。有漏報等とは人天の果報を求むるといふこと。低頭擧手は佛像塔廟を敬禮すること。過去微善已下果報に至るまでは『文句記』十二冊の全文である。掣は『記』には制に作る、義は同じ、牽制せらるゝこと。願智といふは誓願と觀智をいふ。滅といふは火の物を焼き滅ぼす性質あるをいふ。封、果報とは人天の果報に没入し封じ著けられ、人天の修善も是れ菩薩の道なりと開會の出來ぬをいふ。『記』は今いふ所の連續の文なれども、間に今の要にあらざる紙一葉ほどの文あるにより、且つ今の要點は開、心、宿、善、成、遂の文にあることを知らしめん爲に故らに記、云の語を此に置かるゝか。相對種の下に『大乘止觀』は文處未だ見當らず。但しこの文は『維摩經』問疾品(註經、續藏二十七套三、二二九)に出づ。

三 正しく四弘誓願の相を示す(二)。

い、正しく明す。

(首書本)

雖、心性如此而我無始迷、聞圓融教今開覺之。我既知之則又欲令他人悟之、如父母得食而思與其子、故發第一願。謂衆生

無邊誓願度也。生死縛著我精神非空不解。自既有縛若解他縛、無有是處。依之「弘決」云、爲利他故先斷己縛云云。故發第二願。謂煩惱無邊誓願斷也。復闡三諦之法門爭能逗於種種根。「弘決」云、爲度衆生故須習法門云云。故發第三願。謂法門無量誓願知也。若不登法王位者自行化他不自在。故發第四願。謂無上佛道誓願成也。

(四) 修證せざることを誡む。

夫法界常平等故、雖無斷惑證理、法界常差別故、皆有發心修行。是以乍住空寂理而修證佛道。「釋籤」云、故如夢勤加功空名惑絕。幻因既滿鏡像果圓云云。四弘是諸佛惣願。初心必可發之矣。若有別願亦同發之。如釋迦五百大願、彌陀四十八願耳。

四弘誓願のことは「止觀」の五略第一發大心に廣く釋し、近く「止觀大意」に名を列ぬ、「往生要

集」上末段には緣事緣理の二種を開き、その行相を説明せらる。生死縛著より無有是處に至るは「止觀」六之四段の全文である。次の「弘決」の二文、その初は三之四段後は一之四段に出づ。「釋籤」は因果不二門の文、「指要鈔」會本下段に出づ。彼には功の字なし、四字一句とすれば無き方よかるべし。ありても義に妨なし。如夢の勤加とは行願を運ぶ所に少しも自の功を見留めぬことである。真宗の安心にもたのんだ助かつたといへばいかにも機の功を存するやうであるから、蓮如上人は心得たと思ふは心得ぬなり」と示させらるゝと一般であらう。空名の惑とは情有理無の意を顯はす。幻因も亦同轍にて、斷惑證理の跡を見ぬことを喻へたもの。鏡像果圓は今本有無作の四弘を満足することをいふ。五百の大願は首書に「悲華經」を引く。

四 諸文を引いて菩提心の功德を示す(二節)。

一、正しく明す。

(首書本九下)

問、發菩提心有何功德耶。答、功德甚深、不遑稱計。「華嚴經」曰、菩薩於生死最初發心時、一向求菩提、堅固不可動、彼一念功德深廣無涯際。如來分別說窮、却不能盡云云。

「寶積經」曰、菩提心功德、若有色、方分周遍虛空界、無能容受者云云。
「法華疏」云、似解之初、初過二乘之極、極百千萬倍。好堅處地芽
已百圍、頻伽在殼、聲勝衆鳥云云。
「菩提心論」云、若人求佛惠通達菩提心、父母所生身、即證大覺位云云。

「華嚴經」曰、譬如波利質多羅樹華、一日薰衣、瞻蔔華、婆師華、雖千歲薰所不能及、菩提心華亦復如是。一日所薰功德、香徹十方佛所。一切聲聞緣覺、以無漏智、薰諸功德、於百千劫、所不能及云云。
凡菩提心功德殊勝、自利利他滅罪生善等、巨益無量也。

「止觀」引「秘密藏經」已云、初菩提心已能除重重十惡、況第二第三第四菩提心耶云云。所言初者、是三藏教緣界內事、菩提心也。何況深信一切衆生悉有佛性、普願自他身共成佛道、豈無滅罪生

善功能。

「華嚴經」中善財童子發菩提心、彌勒菩薩而歎之曰、譬如有人得自在藥、離五怖畏。何等爲五、所謂火不能燒、水不能漂、毒不能中、刀不能傷、煙不能熏。菩薩摩訶薩亦復如是。發菩提心、攝薩婆若、離五怖畏。何等爲五、所謂不爲欲火所燒、諸有流水所不能漂、瞋恚惡毒所不能中、煩惱利刀所不能傷、邪見煙熏所不能害云云。
又云、如得住水寶珠、瓔珞其身、入深水中而不沒溺、得菩提心住水寶珠、入生死海而不沈沒云云。

又云、如得善見藥王、滅一切病、得菩提心、善見藥王、滅一切衆生諸煩惱病云云。

又云、如有藥樹王、名無壞根、以其力故、長養一切、閻浮提樹、菩提心樹亦復如是。以其力故、長養一切、學無學菩薩善根云云。

又云、如^ク衆生品類^ニ近^ク須彌山^ニ者悉^ク同^ク其色^ニ、菩提心^ノ山亦復如是^シ。若^シ有^ラ近者^ニ皆同^ク彼薩婆若色^ニ云云。

○菩提心の功德廣大菩提心の功德を明すこと、『往生要集』上末^{三三}以下尤も詳悉せり。引文は此書と互に出没あり。文は見易し、一々文處を記して研究に供へんと思ふ。初の『華嚴經』は『止觀』一之^{二五}に引く、『舊經』^二六、賢首品の文である(卍藏七套三、三三)此は菩提心の賢固不動の徳を明したものの、親鸞聖人の『和讃』に金剛心ハ菩提心ナリとのたまふ處である。但しこの文の發心は『往生要集』には『弘決』の意を取つて、特に凡^ニ聖に通ずといひしは意味ありげに覺ゆ。次の『寶積經』は九十六七に出づる偈文、(卍藏六套一、四六六)此は遍法界の徳を擧ぐ、上は質に就き、此は量に就ての徳『法華疏』とは『法華文句』^二二十八^三に出づ、圓教五品の位は外凡にて初心、その中の初隨喜品の人なれば初の初といふ、二乗の極は羅漢、その無疑漢は極の極(無疑解脫の羅漢のこと、四教儀集註^二中^三見るべし)今それを比較して百千萬倍といふ。喩に好堅樹及び迦陵頻伽を出だす。此下は同^六に出づ。前者は『大論』^二十^三後者は『大論』^二二十八^三同七十八六に出づる喩。此は發心畢竟二無^レ別(涅槃經)の徳を擧げしものと思はる。『菩提心論』は最末の偈文、此に引くは即身成佛の徳を歎する意ならんか。次

の『華嚴經』は入法界品、『舊經』五十九、(卍藏七套五、三一八)に出づ、此は二乘に超過する徳を歎す、波利質多樹は三十三天の樹、此に香遍樹と譯す、瞻蔔は黃花樹と翻じ、婆師は雨時華と譯す、俱に此界の花、この文は親鸞聖人の『教行信證』行卷に引かる。以上は總して發菩提心の勝利を歎じたるもの。以下は別して自利他滅罪生善の益を明かす。『止觀』は一之五^二秘密藏經^三は下^三に出づ天台は四種の菩提心を藏通別圓の四教と見る。その意にて今の文を見らるべし。此は自他成佛の徳を擧げたもの。次の『華嚴經』は此も入法界品。舊經五十九、(卍藏七套五、三一七)此の自在樂の喩は離怖畏の徳を歎じたるもの、次の住水寶珠の喩は同經同處(卍藏七套五、三一八)此文は『教行信證』信卷に引かる。次の善見樂王の喩も同處(卍藏七套五、三一七)に出づ。此は滅罪の徳あることを示し、次の藥樹王の喩も同處、經には藥王樹とあり又須彌山に近づく喩は同經同處(卍藏七套五、三一八)に出づ。此二つ俱に生善の徳を歎じたるもの、入法界品には菩提心の尊きことを喩ふるに實に其數二百餘に上る。薩婆若は一切智即ち佛果の智慧を指す。

二、重ねて善知識に遇ふべきことを明す。

(首書本八九)

誠兼濟俱美、無過^ニ菩提心^ニ。而愚鈍身自無^ニ惠解^ニ亦復不^レ遇^ニ教授師^ニ。

○菩提心の功德廣大

者、何生發心修行何世開悟得脫哉。「止觀」云、既不自覺又不值師、邪晝日増生死月甚。如稠林曳曲木。何得出期云云。故三因開發可依知識之緣。種子豈不長雲雨之濕乎。四德圓滿只任善友之教。象牙必待天雷之聲矣。縱令雖有佛種不遇善緣不萌。「法華立」云、若值知識宿善還生。若值惡友則失本心云云。夫登玉樓者自受照耀之光入蘭林者必染芬芳之氣。近善知識亦復如是。顏氏云、與善人居如入芝蘭之室久而自芳。與惡人居如入鮑魚之肆久而自臭云云。古人諺云、凡人之心如水從器器方則方。器圓則圓云云。或書云、麻中蓬不扶而直。泥底之砂不染而黑云云。「心地觀經」云、菩提妙果不難成、眞善知識實難遇云云。故捨惡知識可親近善知識。依之「論語」云、無友不如己者云云。「心地觀經」曰、親近善友爲第一。聽聞正法爲第二。如理思量爲第

三。如法修證爲第四。十方一切大聖主修是四法證菩提云云。

○宗教の本義は善友善師にあり兼濟は自利利他、「止觀」は十之一の文、稠林曳曲木の喩は「大論」三十五七に出づ、首書に引く「弘決」の如し。三因開發とは正了縁の三因佛性を開發すること。象牙必待天雷のことは「涅槃經」如來性品に出づ、「弘決」に三説を擧ぐ、文は首書に引く。何れの説も分明ならざれども、想像するに雷鳴の響にて象牙の上に華紋が浮ぶといふことであらう天の雷と地の象牙とでさへかく相待つて華紋を生ずるに、我等争でか知識の教を待たずして佛種を生ずることあらんやといふ意か。「法華立」は六下の文。顏氏とは「顏氏家訓」卷上(百子全書本)に出づ、此の書は六朝の齊の人、顏之推の作りたるもの、孔子の語を集めたりといふ。首書には「孔子家語」(百子全書本卷四)を引く。古人諺とは出據知れ難し、但し此語は「成語字典」を見るに韓非子に出る孔子の語なりといふ。「人ノ君タルモノハ猶孟ノ如シ民ハ猶水ノ如キナリ孟方ナレバ水方ナレバ水圓ナレバ水圓ナリ」とある。或書とは首書に「史記」を引く。「心地觀經」二文俱に報恩品の文(卅藏十五套、八七七一)「論語」は學而篇。

五 結勸す。

(首書本)

○宗教の本義は善友善師にあり

我等從_レ知識經卷_ニ聞_ク一實菩提_ヲ。攀覓_ニ心息_ヲ但信_ニ法性_ヲ思惟_ニ修證_ヲ今
正是時_ニ。三德秘藏_ヲ理_ニ本自無始無終_ヲ。然而無始而始_ニ始修_ニ三
觀_ニ無終而終_ニ終至_ニ三德_ニ。一悅_ニ值_ニ知識_ニ一責_ニ心蒙味_ヲ猶求_ニ離_ニ三惑_ヲ常
可_レ修_ニ三觀_ニ也。

我等從_レ知識等の文は『止觀』一之五_ニの文に依る。文は發大心の下の六即顯是の中、名字即の止
觀を明す文である。攀覓_ニ心息_ヲとは教理を聞いて少しなりとも解し得らるれば妄念の動くことの聊か
にても輕減するそれを名字即の止といひ、又俱信_ニ法性_ヲじてその他を信せぬやうになつたのが、名
字即の人の觀_ニといふものである。せめてものこと、かくの如き身になられるのは、正しく是の深
妙の法門の流傳せらるゝ今日にある程に、ゆめ修證を怠るなかれと勸めたまふ意。三德秘藏より終
至_ニ三德_ニまでの文は『弘決』一之二_ニに依る。

○第十章 問答料簡して疑を釋す (六段)

一、理觀成じ難きを論じて、彌陀の引接を憑むべきことを決す(二節)。

一、『金錘論』を引て凡夫は理觀に堪へざることを證し、單の唱名に因て西方往生を期せ
んことを問ふ。(首書本和)

第十問答料簡釋疑者問末代行者不堪理觀妄染難轉_シ 卽生之
中其行焉成_シ 故『金錘論』云大師歎佛法不思議云二乘及菩薩
尙所不能測_ル 何況諸凡夫_ヲ 而欲判_ニ此事_ヲ譬如生盲人分別日輪
相_ヲ欲判_ニ虛空界_ヲ一切諸色像_ヲ 而言_ニ了達_ニ者_ヲ畢竟無是事_{云云} 不如
只唱_ニ彌陀名號_ヲ待_ニ於_ニ聖衆來迎_ヲ 彼造_ニ五逆_ヲ之輩_ヲ纔依_ニ臨終十念_ヲ之
力_ニ得_ニ往生_ニ之故_ニ 此義云何。

此章は文は易けれども理觀と散心念佛との交渉甚だ分ち難く、文の段落は問答によりて六段とな
れども、その義分に於ては又岐路に迷はんとするものがある。予は隨分の苦心によりてこの科文を

分ちたること故、先づ科段を逐ふて文を解し、後に此章大體の意趣を研覈せん。
即生は現生のこと、『金錘論』の文は卷末の文である。大師は天台大師を指す、この語は『淨名玄義』
六三の判教結勸の偈文である。凡て學問研究には非難實答といふて、答釋はどこまでも摯實を以て
せねばならぬが、難問は少しは無理でもよい。今の引用の文も原文には二乗の上、佛法不思議の次
に唯教相難解の五字がある、今それを省いたは確かに無理の難じ方である。そのことは次の會釋に
至て顯はるゝ。今は唯教相難解を隠して、理觀は到底不可能なりと大師がいひ置かれたといふやう
にして問ふたのである。

又次の唱名往生にも、只唱の二字は大に注意すべきである。『往生要集』の唯稱彌陀得生極樂の唯
稱と同じやうに聞ゆれども、今は單純に只唱は唯稱の假借文字とばかり看過し難い。此はたしかに
蓮如上人のたゞ稱へては助からざるなりの念佛と同じく、口眞似無意義の念佛をいふたのであらう。
天台でいへば耳に歷れ口に唱へても、圓乘の下種といふ處まで至らぬ念佛をいふのであらう。今そ
れを隠して表には唯稱專修を粧ふて問ふたものと思はる。但し文の據は『觀經』の汝稱佛名故諸罪
消滅我來迎汝の文であらう。五逆等は下々品なることいふまでもない。

二、圓頓の觀力を擧げて轍を改むべからざることを答ふ(三)。

(一)、妄を翻せんことを欲せざるは眞實の求道者にあらざるを明す(二)。

(一)、眞實の願生者は必ず心性を觀す。

(首書本如)

答成此言者口雖言期西方意實無其志也。『淨名經』曰隨其心淨
則佛土淨云云。若有往生淨土之意何先不欲翻妄心乎。身有難
治之病愛身之思深者至千死猶治之。心有難治之病求往生心
切者何又可不治哉。

(二)、感應の道理は水澄みて月泛ぶにあり。

能觀心性得上定時雖遮障萬端而不可有往生留滯。不除業累
欣安養者雖佛大悲願而引攝力猶難可及歟。『文選』云毛嬙西施
善毀者不能蔽其好媼姆倭善譽者不能掩其醜云云。凡自性好
惡不依人讚毀。若夫惡業躰醜彌陀觀音不能掩之故求淨土者
千萬遂往生者一一。若心性貌麗波旬不能蔽期心縱踈來迎無

疑。故「法華疏」云、觀己心之高廣、扣無窮之聖應、機成致感、逮得已利云云。「止觀」常坐三昧、意論止觀、文云、見佛相好、如照水鏡、自見其形。初見一佛、次見十方佛。不用神通、往而見佛、唯住此處。見諸佛、聞佛說法、得如實義云云。「弘決」釋此文云、見色身佛、雖非本期、觀力使爾、故使所見猶如鏡像云云。觀法之功用、不期而見佛、如霜降、鐘鳴、水澄、月泛而已。只是心水止濁、可待滿月來迎。

成此言者、とは理觀に堪へぬから念佛唱へて西方を期せんといふものゝこと。「淨名經」は佛國品の文。この一節の意は眞實の求道者ならば自心を觀せぬものはないはずである。自心を觀するのは即ち妄我を照了し觀破するのである。妄我を破れば、そこに淨土を現するではないかといふ意、要は觀心を捨て、はならぬといふ趣である。

能觀心性等は「法華玄義」二上四十一に「涅槃經」云一切衆生具足三定、上定者謂佛性也、能觀ニルテ心性ヲ名ヲ爲ニ上定トあり、「涅槃經」は首書に引く、此のことは前の心性の研究の下に出づ。此下の文意は要するに自己の心性即ち法性隨緣の妙解が開けて、本有の佛性を見開いて行けば、宿業の

穢身はかはらず罪障は猶在りても、往生には差支はない。されど彌陀の引攝を蒙ふるには自己の煩惱を除かねば、いかに彌陀の大悲なりとても及び難いといふ意。但し此の意味がまだ明瞭ならぬ虞れがあるから。次に「文選」を引て、毛嬙とか西施とかいふ天然の麗質を具へた美人は、たとひ顔をシカメて居てもシカメた儘がうつくしい。誰が毀りても美點はかくし了されぬ。嫫媿、倭傀の如き醜婦も亦それと同じである、黃帝が寵愛なされたとても忽ち美人にはならぬ。吾人は十界を性に具して居ることは法性自爾の徳なれば人の所爲で造りかへることはならぬ。無始已來の顛倒妄念、それは彌陀觀音が掩護して、閻魔の廳を通り過ぎんとなされても、それは到底不可能の事である。それであるから求むるものは多くても往生するものが少い。さりながら珠かけながら迷ふたは事實、迷ふたは珠の存在に影響せぬ。是故にこの佛性の珠は美人の喩の天然の麗質。是亦惡魔も彼句も蔽ふことはならぬ。是に於て往生を期するの念は、たとひ疎く、しくとも、彌陀の來迎はこの佛性が縁を牽くので引攝には疑はない。和尚の法語に「信心アサケレトモ本願フカキユヘニタノメバカナラズ往生ス」とあるも同意か。要するに理觀に堪へぬとて外を見るな自己の心性を觀よ、煩惱罪障の深きを畏るゝな内に佛性を具ふるを喜べといふ意である。此に眞宗教義の孕まれてある處もあらうし違ふ點もあらう。「諸經和讃」を併せ研究すべきである。次に「法華疏」を引く、「文句」一

の文。心佛衆生三無差別であるから、己心を觀する處に佛界の高きも衆生界の廣きも徹照せらるゝから、上求菩提の心に冥する彌陀の妙應をも感じ、下化衆生の妙感をも招く、誠に廣大の利益を得るといふ意。次の「止觀」二之一十の文を引くも同意。此は常坐三昧の意の止觀を明す下の文である。常坐三昧は常行三昧とは異つて、直ちに三道即三徳と達する純理觀であるから。佛の色身の現に行者の前に立ちたまふを要期するではないが、觀が成就したならば、鏡が明になつて像の現する如く、觀力によつて佛身が現見せらるゝといふ意。此二文は俱に後の喩の如く、觀慧の水が清めば佛の妙應の月が泛ぶといふ意。即ち道を求むる心さへあれば理觀は棄てられぬ、たとひ理觀が成就せずとも、妙解がすこし開かるれば、自然に妙觀が浮び彌陀の來迎も疑ひなしといふ意。霜降鐘鳴の語は首書に「山海經」を引く。近く「圓機活法」霜の部にも引く、豊山之鐘霜降而自鳴とある、満月來迎は前の喩を押へて彌陀の尊容をいひ顯はしたものである。

(二)、「金鉉論」の文は權教を簡ぶの釋なることを會す。

(首書本註)

次會「金鉉論」中、實相眞如理、非二乘菩薩之所測、等者、彼文可釋、權教之人全不知之。非簡薄地、異生而全隔其境界。證悟實雖

在大聖、教法從本被下凡。只知六即、淺深、可不懼、不謗也。誠勸
隨時不可偏執。彌陀昔是凡夫。始依觀三諦、理得三諦之悟。
我等同是凡夫。何不修一圓、因感一圓之果。而懼妙理深奧、改
轍者、發心既僻、越萬行徒施。冥冥生死何時出離。悠悠苦海何
世得度乎。努力莫暫廢忘。

「金鉉論」は此章の初に引く(註)大師判教を歎するの偈文。前には文意を枉げて非なる難を立てし故に、此には文の當面より實の答を爲すべく疑難を會通する。その意はこの「金鉉」の文は二乗菩薩でさへ理觀は成就せぬ、況や底下薄地の凡夫が、何の堪へられやうかといふ意味ではない。彼は元と判教を歎じたもの故に前三教の人ではこの佛意は測り知られぬといふたもの。強ち凡夫を簡んだものではない。六即は人の情智の功德によりて六を分ちながら法體は迷悟不二の故に即といふ。されば凡夫も即の意義を知れば成佛の難きを懼るゝには及ばず、亦六の差別あることを知らば煩惱即菩提の大法を誇ることもいらぬ。彌陀も吾等も本來一如と知る上は、一家の一心三觀の妙理に懼れて大乘圓頓の宗轍を改むるなどはいらぬことである。若し此の轍を改めたならば永劫成佛の路は

ないと知らねばならぬ。何故とならば若し一乗の轍を改めて三乘眞實の教に入つて見よ、成佛の成か不成かの疑の下に發菩提心すれば、自然に他の成佛を喜ぶ人に僻みが生じて、而も自分は成佛の出来るやうな僭越の態度に出てねばならぬ。そして修する萬行が成佛の資糧とならずに「終に徒勞を學ばねばならぬ」と。此は一乘三乘の關係であつて、和尙には「一乘要決」の大著作があるから此も多少南都の權宗に當る意があるやうに思はるゝは非か。證悟實雖等の悟は「弘決」三之二^三に出づるに依る。發心僻越等の二句は同一之四^三に出づ。改轍の語は次下に引く「止觀大意」の文に出づ。地獄へ墮ちても、極樂へ往生しても圓頓一乘の大白牛車の轍を改めぬといふ意である。我祖親鸞聖人も、曇鸞和讃に本願圓頓一乘と標して、煩惱即菩提と速に證ることは、逆惡攝する本願唯一乘法である、この本願一乗の轍の外に、吾人成佛の道は無二亦無三であると歎じたまふ。これは確かに横川の餘流を湛へて今の轍を改めぬの意味から出たのであらう。源空聖人は「往生要集」によりて善導に遇ひ、念佛宗を開きたまふ。されど往生之業念佛爲本の轍は改易せぬことを標榜せられてある。親鸞聖人は源空、善導に依るはいふまでもないが、別に「往生要集」によりて天親曇鸞に値ひ、本願圓頓一乘義を唱へたまふことが今の和讃に於て見ゆるかと思ふ。それは外でもない「要集」の正修念佛門は全く形式を天親の五念門に取る、天親を知るには曇鸞に依らねばならぬ。併

し和尙は「往生論註」をまだ眼に觸れたまはぬと見ゆる。「要集」には「智光の疏」を引くも曾て一文も曇鸞の註を引かぬ。たゞ作願門の下に菩提心を釋するに、「論註」の願作佛心度衆生心が淨土論云として引かれてある。それは「安樂集」に依るからのものである。我祖は天親讃に願作度生をのたまふのも、菩提心を金剛心とのたまふも皆この「要集」の作願門菩提心の釋に依らせられてあることは事實である。行卷一乘海の釋の煩惱菩提體無二の引文も亦「往生要集」に依らせられてある。此等の消息を知つて、この書の轍を改むることなかれの論旨に思ひ及べば、明に今の和讃が、逆惡の吾人をして煩惱菩提體無二と頓極頓速に能く満足せしめたまふ功德の大寶海は誠に阿彌陀如來の本弘誓願の圓頓一乘である」と、即ち「往生要集」を経て、この天親曇鸞の絕對他力義に到達したりと示さるゝのではなからうか。果して然らば我祖親鸞聖人は一乘止觀の峯は離れても、唯一乗の車轍は永劫改めさせられぬ一人といはるゝであらう。

(三)、行成就し難きを會して、一たび正境を緣すれば永く不退に契ふことを示す(五)。

(1)、慇懃の志を運べば成佛の種と爲るゝ亦強し。

(首書本^四)

次會行難成就者、取證雖期反掌之間、依根利鈍自有遲速、結永劫

遠因望順次解脫、修因感果之理猶頗不相順乎。若運慇懃之志、何亦無其分耶。「止觀大意」云、內順觀道外附教門、依之修行必不空過。縱此生未獲爲種亦強。盡未來際不復改轍云云。爲種亦強之文深所懸於憑也。縱今生不悟來生必證得。「弘決」云、願諸同遇者、深生慶幸心。冀來世重聞早契無生忍云云。愚意所思、同大師願。

(2)、一句神に染むれば永劫にも朽ちず。

又一句染神微却不朽。促無窮生死是要中要也。「止觀」云、皆以鉤餌隨之不捨、此蔽不久堪任乘御云云。我既吞圓頓教法之鉤。定速登菩提涅槃之岸。况真正菩提心爲因、即往生安養淨土、重聞一實圓頓旨、叶初住無生之位。今以此圓乘結緣、殊欣求上品三生。但以不宵身期上品、雖似非分之所望、以於第一義心不驚

動發菩提心爲其因之故也。

○源信和尚信仰の告白 この一段二節は尤もこの章の中心を成すもの、否恐くはこの書の實際的中心を成すものではなからうか。否今一步を進めて言ひたい。天台荆溪を祖承した圓頓一乘の行者、惠心院源信和尚の信仰を告白せられたもの、とかく見てこの文を再讀三讀するに、言々皆肺腑より出て、句々悉く信仰の結晶ならざるはない。特に「止觀大意」の結文、及び止觀の五略を注釋了つた「弘決」の結願の文が、既に荆溪大師の天台を承けて圓頓止觀を領解したる自信の深き結勸の文であるによりて、愚意に思ふ所も、この荆溪大師の願に同じといつて、その爲種亦強の語を尅銘し、次に更に無量永劫の生死流轉を阿彌陀の一句に促めて之を要中の要と吞み込んだ鉤は終に涅槃の彼岸に引き上げらるゝを慶ぶといふ意。猶次に極樂淨土の上品蓮臺の往生を期せんことは誠に非分の願望のやうなれども、既に幸にも一乘眞實の教義に疑を狹さます眞正の菩提心を發すことを得たからは、往生の業因空しかるべからずと。第九章の初に「安樂集」を引て菩提心は往生の根源といへるに照應し自己の信仰の驚動せざる旨を告白したるものと思はる、猶又前に紹介したる慈惠僧正の「本覺讚」に「佛乘緣ヲ結バズハ何ヲカ出離ノ本トセン、圓融妙境シバラクモ、心ヲ發ス緣アラバ、阿

鼻ノ焰ノ中ニテモ佛ノ種ハ萌シテン」といへるを體得せられたるものと謂はる。猶我祖親鸞聖人が信心即ち金剛心、菩提心と釋したまふも、その流脉が思ひ知らる。

更に文に就てみるに爲種亦強といふは前に出でし強毒の意、「弘決」の文は二之五*に出づ。一句染神の二句は『維摩經略疏』五(續藏二十八套三二六四)に出づ。但し微の字彌に作る。微劫は微塵數劫の意。彌劫は微塵數劫にわたりても朽ちずの意。「略疏」には經言とあり。經の文處考ふべし。

○惡念に對する修養生の注意 次の『止觀』鈎餌隨之の文は二之四^五隨自意三昧の文、四種三昧の第四隨自意三昧は三性縱任の觀である、その中、惡に對して止觀を修する下、法譬合の三段がある、今の文は合法の文である。此は心得置くべきこと故にその全文を抄録する。

若人性多貪欲、穢濁熾盛ニシテ、雖ニ對治折伏ト、彌更ニ增劇スレハ、但恣ニ趣向ニ何以ノ故ニ蔽若不^レ起^レ不^レ得^レ修^レ觀ヲ(法)

譬如^下綸釣^上ニ魚強^ク繩弱^キハ不可^レ爭^ヒ牽^ク、但令^三鈎餌^ヲ入^レ口^ニ、隨^ヒ其遠近^ニ、任^ニ縱^セ浮沈^ニ、不^レ久^{カラ}收獲^上セシガ(譬)

於^レ蔽^ニ修^レ觀^ヲ、亦復如是、蔽^ハ即惡魚、觀^ハ即鈎餌、若無^レ魚者、鈎餌無^レ用、但使^レ有^レ魚、多大

唯佳^ク、皆以^ニ鈎餌^ニ隨^フ之^ニ不^レ捨^テ、此^ノ蔽^不久^カ、堪^ニ任^ス乘御^ニ合

釣はツル、鈎はカギ又はツリバリ、今この譬は「大論」六十六^トに吞^レ餉^之魚雖^レ在^ニ池中^ニ在^レ水^ニ不^レ久^ラとあるに依つて此の譬を作りたまふか。惡に對する修觀の蔽若不^レ起^レ不^レ得^レ修^レ觀とは實に積極的主義の大乗教特質が惜氣もなく發露されて居る。此が日域大乘相應地の日本氣質に能く相應して居る所、惡くいはれても好き事をする、鈎や餌を取り去るやうな惡魚は必ず佳味で而も大きい。惡に強ければ必ず善に強い。「水多きに水多し障り多きに徳多し」。惡が盛にあればあるので修觀の運用が活々としてくる。たゞ運用の注意は手加減唯一つにある。遠近に隨ひ浮沈に任せて、徐々として觀を進める。遂には如何なる強惡なる貪欲も癡愛も乘御^スことが出来るといふ意。少し今とは違へども「維摩經」佛道品には引^テ諸好^レ色者^ヲ先以^ニ欲^ヲ鈎^ヲ牽^テ後^ニ令^レ入^ニ佛智^ニとある有人の詩に菩提鈎上欲鈎竿、四攝法中同事難、不二門闢衆聖默、維摩化後有^ニ親鸞^一といふはこの意か。天台、荆溪、源信、維摩、親鸞とかく取合はせて見ると、皆是れ吾人を救済したまふ善巧方便の異工同趣といふべきではなからうか。

○聞法、結縁、下種の研究 第二篇一五(頁)

○惡念に對する修養生の注意 ○聞法、結縁、下種の研究

我苟發菩提心、所望非他。但恨以無始來、隨逐塵染、猶隨妄我慮、知之執、發心不實、衆行徒施。然而「華嚴」曰、譬如金剛雖破不全、一切衆寶猶不能及、菩提之心亦復如是。雖小懈怠、聲聞緣覺諸功德寶所不能及云云。「弘決」云、縱使發心不真實者、緣於正境功德猶多云云。發心不真實、縱漏上輩數功德猶多故、盡受下品生。

○不實を卑下せざる信念　この一節は引用の「華嚴經」の文が中心である、圓頓の菩提心は、たとひ少しく懈怠しても、金剛は破片でも堅固なるが如く、必ず往生すと、實に我親鸞聖人の横超他力の菩提心を主張したまふと一轍ではないであらうか。「根機拙しとて卑下すべからず、佛に下根を救ふ大悲あり、行業おろそかなりとて疑ふべからず、經に乃至一念の文あり」(覺如上人)。「華嚴」は入法界品、舊經五十九(卅藏七套五、五一九)に出づ。「弘決」は一の四の文。不真實は名利の爲の發心出家といふこと。正境とは圓實の妙理、今は阿彌陀三諦の妙理を正境といふ。淨土九品の差別は經

文の當相である。

(4) 破戒墮獄するも猶免がれ、且つ大悲を行ぜん。

(首書本第六)

又依破戒之身、雖暫廻惡趣、以乘種強免極重苦。縱交猛火中、必扇解脫清涼之風。縱沉寒氷底、定遇中道正慧之日。若夫悟苦即法界、以苦不爲苦、爲同類說法、共可出生死者、不厭在三途、而與物結緣。救人間少苦、其悅心幾許哉。況拔三途重苦、足爲利生極也。彼調達婆藪之垂應迹、於那落觀音地藏之代泥梨之苦器、則是心中深所樂也。故順次生、昇沈偏任佛陀境界、而強恣私情、不可狹而成望。平等一子、慈悲定爲衆生不踈。

○破戒と地獄を怖れざる信念　この一節は自利利他二段に見らる。たとひ觀行が成就せずとも、一たび阿彌陀三諦の正境を緣すれば圓頓一乘の結縁は永く佛種となつて朽ちず、又たとひ破戒の罪に由つて地獄に墮ちても、八熱の炎の中、八寒の氷の底に菩提の芽がいが萌すことであると、此は

○不實を卑下せざる信念　○破戒と地獄を怖れざる信念

自利に就く、次には既に一苦一切苦と悟解し得たる圓頓の人は、苦樂を自在にする能力がある故に、自分と同類の衆生を感化して共に出離の道に向ふ故に、敢て三惡道に在るを厭はぬ、所謂身を殺して仁を致すの精神と爲る。即ち人間の少善を施し少苦を救ふてさへも喜ばしいもの、この大菩提心の實現を地獄の中に見るならば猶更に楽しいことではないか。その實例は調婆達多や婆藪仙や、或は觀音地藏の大悲代受苦を見ても知らるゝ。強ちに自利の私情にのみ驅られて、僅に三界を脱離する位の狭い欲望に促めずとも、順次の往生は彌陀の願力攝受に任せ、自分の心は法界平等の慈悲に住めて、一切衆生を親しい友として行かうではないかといふ意。

必扇解脫清涼之風の文は首書に引く『無量義經』德行品の文と『觀經』下中品の地獄猛火化爲清涼風の文に依る。(一茶の句に「涼しさや彌陀成佛のこのかたは」調達婆藪のことは『法華玄義』四上六十一に如三婆藪調達三示所宜、身ヲ説三所宜、法ヲとある、その下の『釋籤』に『方等陀羅尼經』一九を引て婆藪仙の地獄より來り九十二億の罪人を引卒して佛の説法を聞くことにより聊爾の人にあらざることを見す。又調達が三逆を作りて現に地獄に墮しても、多くの人をして逆罪を犯さゝらしむるは亦是れ常人にあらざることを見す。三逆罪(破僧、出佛身血、殺羅漢尼)を犯して墮獄したることは『增一阿含經』四十六四(正藏十三套四、二〇五)に出づ。觀音大悲代受苦のことは『請觀音經』(正藏拾套十、

九六五)に出づ。地藏のことは未だ檢せず、但し『西方要決』下(續藏二編十二套四、三一七)に地藏、弘願惡趣ニ救生とある。されば『地藏本願經』(正藏十六套一、)に就て研究すべきことを思ふ。

○地獄得道論 第二篇一六 (頁)

○大悲代受苦論 同 篇一七 (頁)

(6) 下愚は溺るゝことを恐る、宜しく來迎を期すべし。

(首書本願七)

雖然名字觀行位猶隔生則忘。何況底下理即凡夫猶未得於毛分悟乎。是以未脫之前經歷六趣恐纏憂苦永以沈沒。非自唯受碎身之苦爲他亦可無一分益。如象子力微身沒刀箭掬湯投氷翻添水聚得忍以前化度利生還增苦集亦復如是。故先生極樂不退砌顯我性法身之理後入分段有爲境導流轉生死之衆。依之今誓云竹窓夢絕之曉草庵露消之夕忝蒙彌陀之來迎必預觀音之引攝。

○實際問題の解決 此一節の意は、前來節を逐ふて、たとひ觀行が成就せずとも、一たび阿彌陀三諦の妙境を縁じたものは、佛種となることが強いゆへに、幾永劫地獄の底に沈むとも朽ちはせぬ。そればかりではない、地獄へ行つたらば、彼等同類のものを導いて、觀音地藏の如くに平等の大悲を現實させやうではないかと論じ來つた。もう此處まで徹底していふて見れば、大乘の至極をいひ盡して何等の餘蘊がないことになつた。そこで此の上は和尚の一格ともいふべき、百尺竿頭一步を進むるの慣手段を取り、最初から觀行が成就せぬといふこの問答科簡章の所對の機が極めて低級のものであつたことによつて、今は雖然とあとへ引戻す詞を置き、十信相似即の位で始めて隔生即忘の難が除かる、名字即や觀行即でも尙此世を去りて、次生の果報を受ければ、此世のことは即ち忘る。況や底下の凡愚一分毛の悟解さへもないものが、そのやうな地獄征服など廣大な誓願を起したとて播いた佛種は朽ちざれども、それが萌さずか萌さざるか、否萌さずは確實なれど、それは何時のことか、問題である。問題は不安である、到底未脫の凡夫は六道輪廻を重ね、ばならぬ。自ら救ふ力もないのに利他の大悲は何として行せられやうか。力のないものが他を救はんとして却て溺れるの憂き目を見んよりは、先づ一たび彌陀の淨土に往生を遂げて、(往相廻向)無始妄我の迷の本性を剝出して無垢の佛となつた上に、分段生死の世界に廻入して(還相廻向)自由自在に衆生濟度をすべきであると。實

に眞宗の親鸞聖人往相廻向の二廻向で一宗を開かれた思想の逕路を源信和尚は此に明白に宣言せられてある。かくて要點を提げて亦誓云等と、實に此書の歸結を此にも漏し置かれたることである。

次に文に就けば、碎身之苦とは總て地獄の斫折磨擗の苦を指す。象子力微乃至氷聚までの文は『止觀』七之四能安忍の下の文。此は止觀の行者が始め陰界入不思議と觀じて、十乘觀法の第八識。次位まで滞りなく觀道を進めて來る、未だ五品觀行即の位にも入らず。或は初隨喜品に入つたかといふ位の處。されどこの時の觀智は非常に鋭くなつてある。經論の一分を見て全分をも知るほごになりてある。その時玉を韜んで名を匿せばよいが。そこに用意が足りない、道譽高く揚つて衆徒雲集し來る、若し此時浮かくと利他の行に向ふたらば、尙自分の力微なるにも拘はらず、他の爲に講説をし提擲をし、弟子を領したならば。自行は終に進まず、却て象の子が箭に遭ふた如くに。或は湯を氷に灑げば却て氷塊を増すが如くに。我身が困難の地位に立たねばならぬ。それゆへ此の場合能く安忍して愈々深く三昧を修し、行力成就するを待つて後に化他に出づるも亦晚くはないといふ文意である。得忍は圓教の初住に入ること、即ち無生無滅の智を得ることである。我性法身は無始の始に妄我を起した、それが流轉の基ひ、されど妄我の心性、それは如來藏法身の外はないから。今極樂淨土でその心性の法身を顯現するといふこと。これは所謂往相廻向の利益のことであ

る。後入分段は此の娑婆三界へ還相廻向すること。(和尙の御歌に「我れたにも先づ極樂へ生れなは知るも知らぬもみなむかへてん」新古今集)彌陀之來迎觀音之引攝は『觀無量壽經』九品の説相に依る。

二、觀心の利益を問答す(二節)。

一、問。

(首書本第八)

問、觀心利益欲聞誠證。

二、答(一)。

〇、尋して上の菩提心、懺悔の利益を指す。

答、先所出之菩提心、並懺悔功德等皆其利益也。

〇、具さに諸文を引く。

又『菩薩處胎經』曰、法性如大海、不說有是非。凡夫賢聖人平等無高下、唯在心垢滅。取證如反掌云云。

『淨名疏』云、若見無生雖處生死、縱任自在自利利他云云。

『弘決』云、如太公爲管壇、令龍神尙不以暴風疾雨而至其境。况

佛法之人長心正念者耶云云。

『大集經』曰、月藏分中他化天魔王發菩提心受記發願云、我等護念現在未來諸佛弟子與第一義相應住者供給供養。若不順我教惱亂行者、即令彼類得種種病、退失神通云云。取

『止觀』云、此金剛觀割煩惱陣、此牢強足越生死野云云。

『弘決』云、若稱理者、舉足下足無非道場云云。

『經』曰、即往安樂世界云云。

現身得證自在利生、蒙冥衆護念、却魔界障難、超越生死煩惱、往生安樂世界。偏是觀心利益也。

觀心の利益は要するに上の第九章に明す菩提心の釋、第八章に示す懺悔の功德、それ等によりて觀心の利益を見よと指示し更に顯著なるもの七文を引く。文に自ら次第あり。初に引く『菩薩處胎經』の文は即身成佛の利益を證す。下の結文に現身得證といふはこの文のことである。この文は『處

『胎經』第四卷に出づる偈文。魔王や梵天や帝釋或は龍女の如き、何れも此の果報身を捨て、更に他身によりて成道するのではない。現身に即時に成佛を得るといふ意。法性無漏の大海には是非善惡の差別はない。唯心垢の滅するにあり無始の妄我を觀破したる一念、證を取ることを掌を反へすが如しといふ。天台は此の文を引て龍女成佛の説明に代うる、即ち『法華文句』二十三_三に出づる。次に『淨名疏』は第五(續藏二十八套三、二七八)に出で、圓教無生の觀の人は生死岸頭に立ちても自利利人自在にして退轉することなしといふ意。下の結文に自在利生といふは此文のことである。次に『弘決』の文は八之二十三_三に出づる。太公望呂尙が管楨の縣令であつた時、周の武王の夢に、風の神が太公望の徳を思ふて、自分の過ぎ行く道に當らぬやう、預め避けさせてくれと乞ふた。それを引用して、世間の徳ある人すら猶かくの如くである、況や佛法の正念を獲たるものには、邪鬼惡神の動亂し得ざる利益ありといふ。結文に冥衆護念とあるは此文のことである。次に『大集經』の文は月藏分の取意としてある。此は親鸞聖人の『現世利益和讚』に南無阿彌陀佛ヲ稱フレハ、他化天ノ大魔王、釋迦牟尼佛ノミマヘニテ、守ラシトコツ誓ヒシカとあると同じ意。この『和讚』の典據が古來明瞭になつて居らぬ。今思ふに恐くは和尙のこの引用か、若しくは他處にもかくの如き取意の類文ありて、それに據りたまふにはあらざるか。古來の考は予の知れる範圍にては『化卷』

引用の日藏月藏の文の内にて、漫然と此等に據りたまふならんと指示するまでのことである。されど今の文を通じて看るときは、恐くは、『經』の第四十九卷、月藏分第十四令魔得信樂品第六の文(正藏六套八、二七三、以下)によりたまふにはあらざるか。元より取意なれども、大體は此によりたまふと考へらる、更に深く檢尋すべきことと思ふ。かくて此文は結文にいふ如く、魔界の障難を却くるの益、適切にいへば他化天の大魔王が阿彌陀三諦の念佛者を守護せんといひ、且つ諸魔眷屬をして、若し我が教命に順はずして、行者を惱亂するあらば、そのものをして病に罹らしめ通力を失はしめんと誓ふたといふことである。少くとも『和讚』と出據を一にすることは確實である。次の『止觀』は五之一_六に出づる。止觀行者の行力の強きことを歎す、次の『弘決』四之三_八の文と共に出離生死の大益を成することを示す。結文に超越生死とは此二文を指すと知らる。中に於て『弘決』の文は阿彌陀三諦の理に稱ふた觀心の眼には、舉足下足皆是れ極樂淨土の菩提道場を見るといふ意。『坐禪せば四條五條の橋の上、行き來る人を枯木とは見て』といふのは衣香扇影を枯木寒巖と見よといふ意、今はそれと異工同趣ともいはるゝかは知らねど、確かに今いふのは積極的に、汎神論的觀想になりてある。但し純粹の汎神論汎神教ではない。常平等に常差別の融即を談じて、實際的修門の上には唯一實在の阿彌陀佛の救濟を仰ぎ順次の生の即往安樂を期するのである。その義を示したの

が次の引文、即ち『藥王品』である、此即往安樂の文も上の第四章註には現生正定聚、生身得忍、肉眼見佛の證文に扱れたが。今は文字の如くに、未來淨土に往生することとして、此書に明す所の觀心の利益としたものである。かくて次の結文は實に此の七個の引文を一には即身成佛の益、二には自利々他圓滿の益、三には冥衆護持の益、四には魔王保證の益、五には出離生死の益、六には往生安樂の益として觀心を結歎せらる。

三、彌陀の加被を憑むべきや否やを問答す(二節)。

(一)、問。

(首書本註)

問、不依彌陀加被、只觀自心、可往生耶。

(二)、答(一)。

(1)、機應の道理に約して必ず憑むべきことを答ふ。

答、不可爾。只憑機偏待應共不可也。以觀理具三千爲機、可仰修德、三千之應。機感相應時、佛法至理也。譬如珠中有火性、對火珠所成、日輪時、能取火耳。善根增長、遂往生、大事、定可任彌陀。

如來護念。大鵬覆影子能生長者乎。

(2)、文を引いて結す。

「弘決」釋發禪定因緣云、雖有宿種現修因緣、必假諸佛冥加外護云云。

「止觀」引「大論」云、池華不得日翳、死無疑、善不被加沈溺、未顯云云。今念佛定亦復如是。必據彌陀加被、應獲往生淨土耳。

○必ず彌陀を憑むべきの論 この問答は上の第五章に於て唯心本具の原理より機應の關係を明かにしたる。それを以て彌陀を憑むか否かの疑問を解答したものである。機應の道理若しくは唯心本具の原理から推論し行けば、いふまでもない、吾人は彌陀をたのむが吾人の機としての意義、また彌陀はたのむ衆生をたすけるが彌陀の應としての意義である。それ故に彌陀が吾人をたすければ彌陀の意義を無にしたものと同時に、吾人は彌陀をたのまねば吾人の資格を棄てたわけである。この唯心本具の原理よりして、この答が生み出された。但しその説明の上に於て、たゞ本具といふばかり

○必ず彌陀を憑むべきの論

ならば、それは哲學であつて宗教の意義をなさぬから。此に本具の上の修徳性徳を機應に分對して、**理具の三千即眞如不變の性徳の上に、吾人を見る時、吾人は是、心是佛と照し得るが、それが阿彌陀の應に離れぬ吾人の機といはるゝものである、亦事造の三千即ち隨緣眞如の修徳顯現を見る時、是、心作佛たまひし、吾人の機に離れたまはぬ彌陀佛の應を仰ぎ奉ることである。かくの如く機と應と即ち吾人の性徳と修徳顯現の彌陀と修性冥合する處、それが感應道交の佛法の至理であるといふ意。**(此の下に注意すべきは機應相應といへば語をなさぬ故に機感といふてある。されば機感に相應するを訓むべし、又時の字は軽く看よ、或は處と見れば可ならんが)。次にこの性徳の機と修徳の應と、そして機應相冥するといふ、それを譬へて、珠の中に火の性がある、吾人の心性の中に佛の性がある。それが今の性徳の方を機といふ處である。次に火の性の具はる珠が、火に成つたは即ち火の珠それが日輪。吾人の心性に具した佛性が修成し顯現したのが、それが今いふ應の彌陀佛。珠の中に火の性があつても、日輪に向はねば火は取られぬ。吾人本具の佛性は彌陀に向はねば修徳顯現はせぬ。されば修徳の善根即ち緣因了因の佛性を増長せしめて、そして安樂世界へ往生することの大事を遂げんには、必ず彌陀如來の護念を憑まねばならぬと、明瞭に解答を了したのである。大鵬影の如くに覆へば子生長することを得る(「維摩略疏」の文、首書に引く)とは親の子に向ふ相、即ち應の感に赴くに喩ふ。「鳴鶴陰に在り其子

之に和す」といふ語がある、これを此に加へて見る、此は子が親に向ふ相。即ち機感の佛應を引くに喩ふ。父子の天性相關する所にあらずは這般の消息は知得し難きものと味はるゝ。

一念三千 **理具三千(性徳)在迷理(生)機一珠之火**
事造三千(修徳)出纏事(佛)應一火之珠
 珠取火一感應道交、往生大事遂成、佛法至理

次の引文の下、『弘決』は九之一ハス觀心を進めて行く間に、觀に激せられて、宿習の種々の禪觀が紛起發現する。その場合に、その禪を對象として、三千三諦の觀を修するのが、十境の中の第六禪定境である。今はその禪定を激發する因縁を明す下の文である。『止觀』は同ハスの文。『大論』は一ハスの文である。

四、散心念佛の生不を問答す(二節)。

(一)、問。

(首書本百研)

問、不修理觀、只稱一佛名號、人得往生不如何。

(二)、答(上)。

正しく往生を得べきことを答ふ。

○必ず彌陀を憑むべきの論

答、亦可得往生也。

○散心念佛の往生を肯定す 此章は初から文段が六と分かる、それは六個の問答によりて自然に區分せらる。その中、この第四段が全く一章の中心であると思はる。先つその次第を考ふるに第一段には理視の成せざるを因故として單の散心念佛を以て西方往生を期するの可否を問ふた。然るにその答は何處までも一心三觀の宗轍を改むべからずといふにある。かくて議論は進んで、眞實の求道者ならば理視の成就せぬまでも修視を續くる用意がなければならぬ。その周到なる用意の處に、自然に感應の道が開かれる。尤も不完全なる修視に何の功力があるかといへば、それは圓頓一乘の境視特に阿彌陀三諦觀は一たび耳に歷れ神に染むれば、佛種となりて永く朽ちざるのみならず、圓解が漸く熟すれば、地獄にあつても自利利他するといふ。こゝまで議論は進めたけれども、下凡は溺れる虞があるといふて、忽ち論鋒を引きしめて、先づ西方の往生を期して臨終の來迎を仰ぐべしと結んだ。かくて第二段には視心を勵ます意味に於て觀の利益を問答し、而かもその益の究竟する所は即往安樂にありとする。第三段に至つては心を觀するに彌陀の加被力を憑むべきや否やの問を起して、その答は甚簡潔、機應の道理として憑むべきは論なしと決す。かくの如く議論の進行は理視に堪へず

といふものには反つて強毒的に觀心を勸めるやうに見らるゝ。勿論阿彌陀三諦の觀心ではあるが、いかにも和尙の内面には遺る瀬がないといふことが見ゆる。是に於て突如として問端は啓かるゝ、それは別でもない第一問答に於て、造作もなく排棄された散心念佛。尤も問も從容であつた答も曖昧であつた。されど事實は第三問答まで視心を主とする西方願生であつた。然るに今は明白に、理視を修せざる但の事の念佛即ち散心口稱の往生を問ふた。問が露骨であるから答も明晰である。只一言に亦往生を得べきなりと散心念佛の往生を決した。これが今この第四問答の要領である。以下之を釋成するに六節を分つ。その要點は理視は勝れ散念は劣る。されど必しも往生には理視を要せずといふにある。但し是に由つて吾人は考へねばならぬ。和尙は理視はいらぬといひながら、議論の進行は純然たる廢立ではない。寧ろ理觀を勝れるとし且つ圓觀の念佛を修すべしと勸めて居る。和尙にはかくの如き矛盾がある。これに對して吾人はこの矛盾を如何に解くべきであるか、亦矛盾と見るべき性質にあらざるかを考へねばならぬ。若しこの解決を着けざる限りは、和尙の眞意も知り難いが此書一部の歸結も決し難いことと思はる。然れども吾人は此の段と次の段とを熟讀するによりて和尙の眞意を粗々得たるやに思はる。披陳して此の問題の解決に供へんか。之を一言にすれば理視を修せざる散心念佛も亦一心三觀の宗轍を改むるものにあらずといふことである。之を明にす

るには二の方面がある。一には往生成佛の意義に約す、往生即成佛を立つるは曇鸞大師を祖承する親鸞聖人の獨特の宗義である。普通の考では往生と成佛は始益と終益の關係である。それ故に今も此書には(第五章の初)往生は華報、成佛は果報と分けてある。されば無觀の散心念佛にて往生すとも、この念佛には三諦三觀を具足し乃至八萬法藏十二部經を攝めて、功德其深なることを知る、今の問題は但それ觀行の成せざるまでのことにて、決して一心三觀の宗轍を改めたのではない。即ち行者の機相は散心の性徳の念佛なれども、能應の彌陀は修徳顯現の三身圓滿の果佛である。それ故に臨終に引攝して易く往生を得せしめたまふのである。そして一とたび往生する上は、彼土の不退の土徳として無生法忍を證得し、更に一心三觀を修習して任運に薩婆若海に流入するといふ順序である。但しその修性の道理を一切皆知り分けねばならぬかといふに、知ると知らぬは人の情智の功能のことなれば、それは往生の得否には關係はない。既にこの萬徳圓滿の南無阿彌陀佛を、稱ふれば決定して往生すべしと、耳一とたび圓聞と歷れて、覺悟の華鮮かに行者の心中に開かれぬれば(是即親鸞聖人の他力信心)佛種は此に第八識の解性に播き下されて、永く成佛の業因を絶たぬといふ道理である。決して圓頓一乘の宗轍を改むる要はないのである。併しながら猶、和尚の立場は源空・親鸞の兩聖人の如き、廢立の念佛ではないではないかといふ疑がある。然り和尚の宗の教義としては決して廢立

の念佛ではない、それ故に今此に他の一方面的の見方によりて、この矛盾の疑を解くべきである。それは行者の機根に約していふのである。上根中根の人には故らに散心念佛を勸むるの要はない。常行三昧にも口の説默の下には歩々念々聲々唯阿彌陀佛にありといふ教へがある。理觀相應の事の念佛は無論具足するものである。此等は事理雙修といふ普通の批評語を用ふべきものではない。これを故らに雙修といふならば、唯理觀の念佛といふものは決してないことになる。されば故らに散心念佛の往生を論ずるは理觀に堪へざる下根の凡機に就いてのことなれば、教義の上には廢立はないけれども、人の上には理觀を廢して散心念佛を取るの事實である。かゝる意味に於て、和尚の念佛を如子頑魯之者乃至我亦在彼攝取之中煩惱障眼雖不能見の文より、徹視されたる我親鸞聖人の眼には、實に和尚は專修念佛の行者廢立の念佛爲本にいたしましたことであらう。今のこの問題の解決も亦自らこの根機の上より論じて、和尚の眞意は山を離れず宗轍を改めずして、而かも自行の上の念佛には、理觀を止めて散心念佛の往生を取り、汎く下機を漏らさぬ彌陀の悲願を宣傳せられし靈山聽衆の古佛であることを知る。同時に此書と『往生要集』と全く歸結を一にすることを知らるることである。此にて此章の初に先づ文を解して後に大體の意趣を研覈せんといひたるも、今はそれが明瞭になつたと考へる。散心念佛の論題研究は『妙宗鈔講要』に辨じ置きし故に今は略す。

(2)、願文を引いて證す。

(首書本百廿)

彼、繫念定生之願、未云修理觀。聖衆來迎之誓、只是至心稱名。

(3)、名號の功德を擧ぐ。

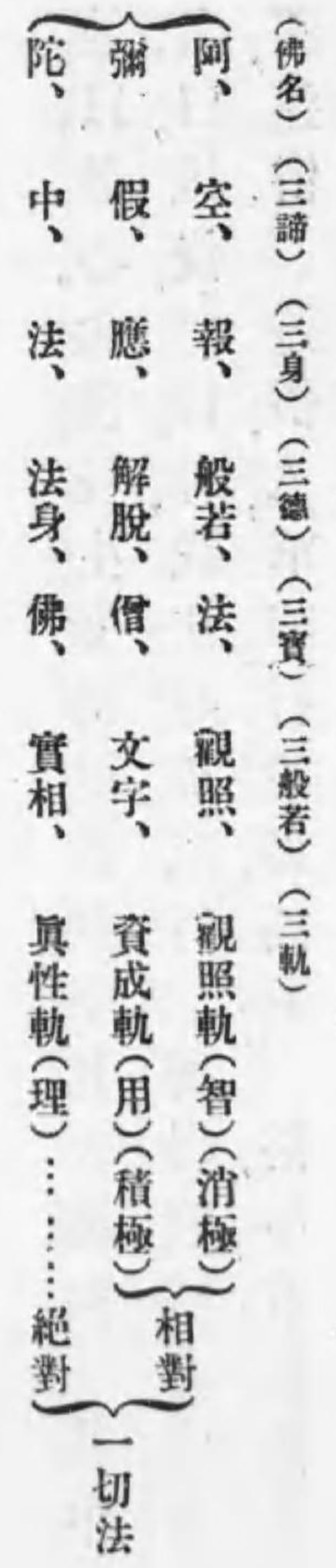
夫名號功德以莫大故。所以空假中三諦、法報應三身、佛法僧三寶、三德三般若、如此等一切法門、悉攝阿彌陀三字。故唱其名號、即誦八萬法藏持三世佛身也。纔稱念彌陀佛、冥備此諸功德、猶如燒丸香、一分衆香悉熏浴大海、一涕用衆河水耳。

(4)、慈恩の釋を引く。

故慈恩云、諸佛願行成此果名。但能念號具包衆德。故成大善、不廢往生云云。

繫念定生は二十の願、繫係相同じ、聖衆來迎は十九の願、至心稱名とは願文を下々品の至心具足稱南無阿彌陀佛、見金蓮華猶如日輪住其人前の文に會合して簡單に稱名來迎をいひ顯はされたもので

ある。所以空假中等の文は左圖に對照せらるべし。



○唱名の一心三觀といふ口傳 阿彌陀の三字を空假中に配することは未だ出據を明にせず、但し口傳法門の中にいふ所を視れば先づ大體に於て三重の一心三觀といふことがある。三重とは一心三觀、法爾の一心三觀、言説の一心三觀をいふ。その中、初二は『法華經』の迹門の上にて立つる、又その中、前者は開權、後者は廢權となる、開權とは爾前隔歷の三諦を法華に會して圓融の三諦となりたる處。廢權は不變眞如の理内に法爾として三觀同時なるをいふ。第三の言説の一心三觀といふは此は本門事圓の上に立つる。この第三は即ち三千事々本來常住にして、而かも三觀顯照しつゝある處、行者の言説も、法界の風聲水韻、皆是れ一心三觀ならざるなしと見るを言説の一心三觀といふ。又この言説の一心三觀に就て、唱名の一心三觀、山王の一心三觀といふ習ひありといふ。それは南

○唱名の一心三觀といふ口傳

無阿彌陀佛と唱ふる是れがそのまゝ一心三觀である。何せなれば阿彌陀の三字は即ち三觀であるからといふ。山王の三觀は南無山王と唱ふれば是亦言説の一心三觀である、それは外でもない、山王の二字が文字の形が三を一にて貫く、而かもそれが不縱不横であるからのことゝ。此等の口傳法門によりて知らるゝのは阿彌陀の三字を三諦に配するは、法界の事々皆一心三觀と觀する、觀心の重にていふことであるといふことである。猶更に考ふべきことなれども氣付きたるまゝを記し置く。冥備とは冥は顯に對す、人知れず無自覺に一切の功德を周備し具足するといふ意。丸香を燒く喻及び大海に浴する喻は俱に『止觀』一之二十三に『首楞嚴三昧經』上六及『涅槃經』會疏二十二に引くに依る。慈恩の『西方要決』の文は首書に具さに引く。續藏二編十二套四、三三三に出づ。

(四) 往生の事實を擧げて散心念佛を勸む。

(首書本百廿)

是以散心念佛往生極樂從昔至今其數幾何。其中梁朝有一僧名曰雄俊。口善說法身無戒行。所得利益非法食用。懶僧行即還俗。還俗入軍陣行殺害無量。俗中有難而亦出家。如此凡七遍極惡不善也。爰死經一日蘇而語言閻魔法王使我引入

地獄其時俊高聲曰俊若入地獄三世諸佛即成妄語。何者曾見『觀經』說下品生者造五逆罪臨終十念尙得往生。而吾雖造罪業不造五逆若論在生念佛即不知其數。俊若入地獄誰信佛說。爲此語時應聲華臺現空中。閻王見之歎曰善哉善哉禪師既得淨土迎獄中所有衆生聞汝聲者亦皆念佛不久悉得往生。禪師從此直不往生暫還人間爲不信者示不如法念佛功用微妙。時俊蒙閻王可欲還娑婆所現華臺向小路去。俊隨入路如此蘇也。聞此語者謂俊誑言。其後俊六時念佛精進勇猛。經三月無病卒。隣里鄉閭或有聞音樂者。或有見光明者。悉得信心念佛者益多云云。散心念佛誠深妙哉。智解滿胷人猶不堪理觀。况尼女在俗只可追俊先蹤也。如彼云浴不必江海要之去垢。馬不必騏驥要之善走。念佛不必理觀要之往生。雖散亂中念佛

○唱名の一心三觀といふ口傳

二百八十一

只用誠心遂蒙引攝。

(4) 追て散念に對して理觀の勝を示す。

但點煩惱卽是菩提。誰不備於慮知性乎。今值釋迦聲教。練磨其心轉憶想成智慧。宜乃是時。豈捨理觀之如意而諍散心之水精。尙可從眞善知識速修習圓觀念佛也。

雄俊の傳は『往生淨土瑞應剛傳』に出づ(唐道詒作、續藏乙八卷二)甚簡略なり、何か別に據りたまふものありしならん。又宋の戒珠の『往生傳』中卷にも載す。其他、『新修往生傳』諸上善人詠『往生集』等何れにも載するところである。(同上)首書に『統紀』を引く。散念佛誠深妙哉等の文、大に注意すべき語なりと思はる。智解滿爾、智人、猶不堪理觀といふ、いよく和尚の本意は理觀に堪へざる人を所對とすること全く『往生要集』に異らざるを知る。如彼云の三字甚解し難し、この文のまゝに看れば、如何にも雄俊がいふたやうに聞こゆ、されど諸傳にそのこと見えず、のみならず雄俊の言であるべき理なし。然らば文字に脱落あるべきか更に考ふべきことである。次の文に理觀を如意寶珠に喩へ散念佛を水精に喩ふ、是れ確かに勝劣を判じたるもの。而かも最後に速に圓觀

の念佛を修習すべしといふ。此は前來の所明と相反するに似たれども。前にもいふ如く、一心三觀の宗轍を改めざる主義に於て、かくは觀心を懸ろにしたまふことである。かく解釋し去るは猶和尚を觀察する皮相の見であつた。實は此に前と相反して理觀の勝れたるを故らに繰返す所以は次の段の散念存立の一波瀾を起させん爲に、水を激して流を急にするの手段を用ひたるものと見るべきであらう。圓觀念佛に就て首書に和尚著作の『觀心往生論』を引く參照すべし。

五、散念佛の廢すべからざることを問答す(二節)。

一、問。

(首書本門)

問、散念功德劣者、勞心修之何爲。不如無所作生涯安過之。

二、答(上)。

(一) 勝劣は理觀の人の判する所なり。

答、此言甚誤。爲兼學其理觀、貶事念佛爲劣道理可爾。

(二) 散念佛を廢するは是懈怠の人なり。

若進退失據、偏言廢念佛、是大懈怠、極無道心、人之所謂也。何人

從初心卽得理耶。以事爲初門可習理觀。

(三) 精進の人は勝劣を論ぜず。

又不論功德勝劣事理念佛俱往生者只可如救頭燃敢莫致餘言事。夫人之在世危乎秋露之栖叢命之無常猶同春夢之凝枕。有何暇而致無益言論乎。種種問橋智者所呵也。

○散心念佛の奮勵 この一段は文看易し、慇懃の教示、再讀三讀すべきことを思ふ。問の趣きは尤も露骨に吾人の放逸、邪見、嫩惰の性情を道ひ破る。答の趣は先づ理性的判斷に訴へる。散心念佛の劣を論ずるは理觀を修し得る資格あるものゝこと、いふて(1)、次に理觀に堪へざるものゝ尙事の念佛を劣れりといふ如きは畢竟無道心なりと排す(2)、但し此下に散心念佛を理觀の初門と爲すといふは彼の宗轍を改むべからざる根據に立つていふこと。次に求道心の上より判斷して、事理勝劣を論ずる勿れ、事にも理にても往生すべしと聞かば直ちに勇猛精進して他を顧みず、唯速に往生の覺悟をせよと(3)。吾人も讀去つて只管に仰信すべきことを思はせらる。

如救頭燃は善導の『觀經疏散善義』至誠心釋に出づる。種々問橋等の二句は『止觀』十之二(註)の文、『大方等陀羅尼經』三十三(藏十一套七、四二九)に出づ、文は首書に『補註』を引く、但し經文を略抄したるもの。此は釋尊の過去世に於ける失敗譚である。橋に就いて不急の問題七千八百條を設け、遂に齋會に遇はず空しく歸りたりといふ。智者とはその譚の中に出づる一有智者を指す。

(四) 諸文を引く無道心の者を誡む。

(首書本五十五)

次生涯無所作安過之者其不可然。三界無安猶如火宅。一篋偏苦非可耽荒。四山合來無所遁避。何生安穩想不求出離乎。悉達太子夜半踰城到仙人洞大王遣使請還之時太子堅辭而說偈言譬如金屋火熾盛如滿池華有蛟龍如食甘味毒藥和王位受樂後大苦云云。非音樂雜苦終亦有其限。縱生忉利天上五衰悲早來。雖成轉輪聖王七寶不久持。輪王不免之黔黎亦如此。凡流轉生死之可厭者以昇沈處所之不定也。形無常主只爛壞。

墳墓之間。神無常家、徒踰躡趣生之路。身與心猶不相伴。况命與財而相隨乎。綾羅之服在生之飾也、何隱冥路。金玉之寶、今世之貯也、全不淨土資。『大集經』云、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者。唯戒及施不放逸、今世後世爲伴侶云云。故勤行布施、堅持淨戒、心不放逸、苦修念佛、早貯世世不朽之財、可儲生生不離之伴也。

此の一節は前に論せられた自然の結果である。三界無安猶如火宅は『法華經』譬喻品の偈文。一篋偏苦、四山合來は『止觀』一之四三の文に依る、この一篋四蛇の喩は『涅槃經』二十一德王品(會疏二十一)に出づる見毒觸毒氣毒齧毒を一身四大に喩ふ。次の四大山の四方より逼り來るあらば何の計を以て遁逃せんとするといふは同經二十七(會疏二十七)に出づる。此は佛が波斯匿王に試問したまふた喩である。四山は四大、四方は生老病死の四苦に喩ふ。悉達太子の偈は文處未だ明ならず、更に考ふべし。黔黎は黔首とも黎首ともいふ、共に頭の黒いといふ文字、此は民百姓のことをいふ、今は輪王に對す。形無常主神無常家の二句は『賢愚經』十一(七藏二十六套四、三〇二)に出づ、踰躡

は『法華經』信解品に吾人の無始無明に欺かれ、法性の都を出て、三界流浪の身となりしを、父に離れし窮子に喩へて踰躡辛苦五十餘年といふ。踰躡と踰躡と文字は異れども互に通ず、字義は行くこと正しからざる貌、今は孤獨流浪の意に用ふ。五十餘年は六道輪廻のこと。趣生は六趣四生。獨生獨死獨去獨來。六道輪廻を顯はしたる語。身與心等の論旨は甚愷切である。身財及妻子眷屬の終に伴はざること『雜阿含經』に一夫四婦の喩を擧ぐ(七藏十三套十、二二四)今の文と参照すべし。『大集經』は十四三に出べ(七藏六套六、九七)經文には無隨者に作る。『往生要集』上本今と同じ。花山の法皇出家の因縁は此文にありと傳ふ(『古事談』)何れに愚かはなければども、此一節は格別に文字を洗鍊され、言々句句々金聲玉振と拜まる。

(五) 諸文を列れて重罪すら尙往生することを示す(三)。

(四) 天台、淨土論、覺經を引く。

(首書本)

又世人卑下於重罪、身有絕往生望、亦不可然也。

天台云、無量壽佛、國雖果報殊勝、犯重罪者、臨終之時、懺悔念佛、業障便轉、即得往生。雖具惑染、願力持心、亦得居也云云。

「淨土論」云、若有重業障、無生淨土、因乘彌陀願力、必生安樂國云云。
「平等覺經」曰、阿彌陀佛與觀世音、大勢至、乘大願船、浮生死海、就此娑婆世界、呼喚衆生、令上大願船、送著西方云云。

(2)、彌陀の願力に由ることを示す。

夫蒼蠅之翔千里、附驥尾之故。巨石之渡四溟、載船上之故也。
縱雖惡業之石重、方乘四十八願王之船、欲渡娑婆憂苦之海。

(3)、願王に従はずんば冥官の責を免れざることを示す。

自稱沙門、振手而去、冥官之責、不知所免。不可陳不遇佛法、釋迦、
遺教專盛弘之比之故。不可謂不具諸根、六根全備、堪修行之器
之故也。只墮天性懶惰之失、卷舌無答。不亦悲哉。

愈々出て、愈々懇切なる西方願生の勸章である。源信和尚を日本淨土教の鼻祖として、我親鸞聖人が列祖の初に崇奉したまへるは、他に比類なき卓見なることはいふを待たねど、今かくの如く遺

文を耽讀するに就いても、それが更に深く敬承せらるゝことである。天台の語は「維摩經略疏」一
(續藏二十八套三、一九六)に出づ。具さなる文は首書に引く。「淨土論」は迦才の「淨土論」(續藏二編
十二套三)に類似の文あれども、全文は未だ見當らず、更に檢尋すべし。

○三尊呼喚の文に就て 「平等覺經」の彌陀・觀・勢が有情を呼ばふといふ文は「往生要集」中本

三にも引く、今の文と少しも異なる所なし。我祖親鸞聖人「正像末和讃」に彌陀觀音大勢至大願ノ船
ニ乗ジテゾ生死ノ海ニ浮ミツ、有情ヲヨバフテ乗セタマフとのたまふは全く此文に依りたまふ。
此文は「覺經」になし、古來の説に迦才の「淨土論」に依りたまふといふ、今此書に「淨土論」の
文と連引したまふより見れば實に然るべきこと、信せらる。「淨土論」は下三(續藏二編十二套三、二
五)に出づ。彼には平等覺經曰の語なし、之を「平等覺經」取意の文と見たのは誰人であるか、恐
くは源信和尚の擇法眼であらう。それはこの「淨土論」の前後を照察するによりて得られたるもの
ならん。但し問題がある。先づ彼の論文を見るに、上に厭離穢土欣求淨土の説相を丁寧にして、次
にかくの如く厭忻の旨を教ゆとも、智者は悟れども鈍者は聽へし難い。之を勸めんには如何がせん
と問を立て、之を答ふるに、依「無量清淨覺經」説「始從地獄中來、殃咎未盡故」といふて、

次に『覺經』のその意味の文を引き、續ひて『壽經』の憍慢弊懈怠難以信此法の二句を引き、次に又と置て『壽經』と『覺經』とを湊合して無極之勝道易往而無人といひ、更に易往と無人とを分けて、五返までも繰返し、鈍者難信の旨を釋明せらる、その第二返の易往を釋する所に、又阿彌陀佛等といふて今の三尊呼喚の文が出てある。そして次に若衆生有上大願船者並皆得去此是易往也とある。されば此文は取意としても、文の上では何經ともいふてないから判じ難いのである。然るに今和尚は判然と平等覺經曰と銘を打たれるからは、何を見込んでのことか此が問題となるのである。此に就て古來の考に二說ある。一は取意とする、一は覺經の文とする。取意とするに就ては『覺經』ばかりではない、『壽經』の文意をも併せ取意するといふ、それは今いふ如く此論の文に前に二經を擧げて西方淨土の昇道無窮極なるに對し易往而無人の歎あることを示されてある。それ故に今の文も『覺經』二尊對坐、衆生濟度の合議、二尊の急救の文と『壽經』の必得超絶去等の文を更に龍樹の八道の船に乗じて難度海を度するといふ易行道の教意に會合し、之を以て三尊呼喚の文としたまふと見る、此說では迦才が既にかくの如く取意したるものとするのである。(易行院講師の説)今予の考は之を潤色して、この迦才の取意を『覺經』『壽經』とせず、今一步を進めてこの『淨土論』の文の發端が依無量清淨覺經といふてあるから、これへ對照して、この文は

單に『覺經』の取意なりと見たい。超絶去の文は『覺經』にも明白である、『壽經』を信はずともよい。かくすれば源信和尚が『覺經』曰と銘を打ちたまふに愈々條理が明になると思ふ。又次に取意にあらず、覺經の文なりといふは、なりと斷定することは速斷に過ぐるも、ならんかごまではいふの理がある。それは外でもない『大經』異譯七缺の中の帛延譯の『覺經』にこの文あるべしといふのである。(如說院正條未讀錄に引く一説、眞宗大系)予は初はこの説を一笑に附し去り居たれども、再考するに至つて亦根據ある説と思はる。それは此の『淨土論』に引く『覺經』の文

若善男子善女人聞說淨土法門必生悲喜身毛爲豎如拔出者當知此人過去已作佛道來若復有人聞說淨土法門都不生信樂、當知此人始從三惡中來殃咎未盡爲此無信向耳我説此人未可得解脫也。

此文は三處までも引く、而かも經證十二部の一として用ふ。他の同列の文を見るに一文も取意の文はない。さればこの文獨り取意の文とは思はれず、即ち之を現存の支婁迦讖譯の『覺經』に照すに、文意は同じけれども語句は大に異なる。其文左の如し。

佛言其有善男子善女人、聞無量清淨佛聲、慈心歡喜一時踊躍心意清淨、衣毛爲起拔出者、皆前世宿命作佛道、若他方佛故、菩薩非凡人。其有人民男子女人聞無量清淨佛聲、

不信有佛者不信佛經語不信有比丘僧、心中狐疑都無所信者皆故從惡道中來生、愚蒙不解宿命殃惡未盡未嘗得度脫、故心中狐疑不信向耳等(記藏六套三、三二)是に於て今の三尊呼喚の文も亦迦才の取意したるにはあらずして、或は帛延譯の經の全文にてはあらざるか。是れ暗推に似たれども、亦或は然らんとはいふべきである。何れにしても帛延譯は現存せざる故に、只他書に引用せられしものあるを發見して後に、正に此論は定まるといふべきである。此は『和讃』の研究にも必要のことなれば且く記して他日の參考に供し置くことである。

(六) 臨終正念は平生の用心にあることを示す(五)。

(1) 十念成じ難きことを歎す。

(首書本九下)

我爭必以今生可爲生死終乎。坐歎臥歎、最後臨終之時恐不安住正念。寤思寐思、一期生涯之暮、定難成就十念。

(2) 十念成就せば往生疑なきことを示す。

十念若成、往生不疑。故「要決」云、上盡現生一形、下至臨終十念俱能決定、皆得往生云云。

(3) 顯密の行法意りなかるべきを示す。

依之積功累徳、所祈無貳。彈指散華之善、偏望九品蓮臺、隨聞一句之因、併爲三身覺位。加之修三密行法、繫心於五相成身之月、凝一實觀門、期悟於八功德池之蓮。

臨終正念は『阿彌陀經』の臨命終時心不顛倒より出でしならん。

○決定往生、祈念無貳の語意 「要決」は初の序文に出づ(續藏二編十二套四、三〇四)。前の往生不疑を承けて此文を引く、文の中心は決定往生の四字にある。故に依之と承けて次の文に所祈無貳とあるは、平生よりの用心を示す。只祈念すべきは、ふたこと、ろなく疑ひなく決定の想ひにて臨終正念を期したしといふ意ならんか。是れ實に親鸞聖人の唯信念佛義を興立せらるゝ思想の逕路を示したるものではなからうか。道心の深き人にあつては觀心念佛であれ、散心念佛であれ、全くこの不安の念の晴れ遣らぬのに苦しませられたものであらう。晴れても不安、陰りても不安、況や懈怠は起る悔み恨みは逆立つ、妄念妄執は寸時も止まらざるに至つては、いよ／＼臨終が思ひ遣らるゝといふ

○決定往生祈念無貳の語意

ことであらう。さればいかにしてなりとも、見佛、又は好相を得んことを欲するは自然の要求でなければならぬ。それ故にたとひ散心念佛の人にありても、單に理觀は成らすとするも、彈指散華の緣因佛性、又は隨聞一句の了因佛性によりて、來世九品の蓮臺に生れんことを念じ法報應の三身萬徳の果を得んことを望むの切なる上は、出來ぬながらも顯密の行法に心を係け、極樂の依正に想を凝らさんとするであらう。此等の釋を拜讀するに就ても、如何に他方眞宗の信心を決定せしめんことに、苦心したまひし宗祖列祖の偉功を、今更の如くにありがたく味ひ奉ることである。それにつけても蓮如上人の御誠の如く念佛行者は「他宗を誹ること勿體なき」と同時に「心得たと思ふは心得ぬなり、心得たと思ふことすこしもあるまじきなり」の教訓に恐れ入り、一大事の後生を「はや悟りたる」かの如くに取扱はぬやう致したきものである。

修、三密等は密教の修法、疑、一實等は顯教の觀道。中に於て三密と五相成身觀は密教の重要な觀法である。弘法大師の『秘藏寶鑰』には凡修三密、瑜伽、觀行一人當須修三密行證悟、五相成身、義也とある。五相成身は豎に行者が佛となるの順序に就ての觀。三密は横に行者と本尊と入我我入彼此交渉する觀心である。三密とは手に契印を結び口に眞言を誦し心は三摩地に住して三密相應し、本尊と自身と互に相渉入すれば速に悉地を成就すといふ、五相成身は元と『金剛頂經』より

出づ、近くは『秘藏寶鑰』下下に説明せらる。首書に引く『教時義』は全く『寶鑰』の文である、一に通達心、二に成菩提心、三に金剛心、四に金剛身、五に證菩提獲堅固身。次での如く先づ身心を觀じ(1)、菩提心を成じ(2)、かくて本尊を觀じ(3)、本尊を自身に攝入し(4)、此によりて本尊と自身と彼此交渉し冥合して佛身を圓滿する(5)、といふ。月と喩へたは佛身の圓滿をいふ。『寶鑰』には人の心は合蓮華の如く佛の心は満月の如しとある。猶行者の本心を觀じて湛然清淨なること満月の光の虚空に逼じて分別する所なきが如しともある。是を以て月に喩ふる意も自ら知らるゝ。一實觀門とは一乘眞實の圓觀は『妙法蓮華經』より出づ、その開示悟入の妙覺は極樂の八功德池の寶蓮華上に期すべしといふ意。

(4)、文を引いて懈怠を説く。

(首書本九左)

雖然無明之雲厚、覆法性之空未明、恨壯齡不遂精進之志、瞑目定悔懈怠之過。

『大莊嚴論』曰、盛年無患時、懈怠不精進、貪營衆事務、不修施戒禪、臨爲死所吞、方悔求修善。智者應觀察斷除五欲想、精勤習心。

○決定住生所念無貳の語意

者終時無悔恨。心意既專至、無有錯亂念。智者勤投(捉)心臨終、

意不散。不習心專至、臨終必散亂云云。『華嚴經』曰、如鑽燧求火未出而數息火勢隨止滅。懈怠者亦然云云。

披此等文、落淚難禁。晝夜勤精進、莫空明空暮。縱令雖競寸陰、生涯修善非淺。

先德云、一世勤修是須叟間。何捨衆事不求淨土云云。

『大莊嚴論』は馬鳴の作、此の偈は『往生要集』上本(註)厭穢門の終に引く。盛年等六句は第三卷に出づ(正藏二十一套六、一二)。智者應觀察以下は第八卷に出づ(同三七)。但し今の投の字は捉の字の寫誤なれば改むべし。心を捉ればと訓むべきか。施戒禪は六度の中の三を擧げて餘を攝す、精進は文の上に顯はれ、智慧は觀察の語に、忍辱は五欲の想を斷除するといふに見ゆ。『華嚴經』の偈は舊經五の明難品に出づ(正藏七套三、三〇)。如鑽燧求火は譬如三人燧火に作る。未出而數息も未出數休息

に作る。次の先徳の語は誰人なるや知れ難し。但し、『無量壽經』の雖一世勤苦須臾之間後生等の文と何不棄衆事勤行求道德等の文とを取合せたことは明かである。

(1) 無常迅速を擧げて念佛を勤む(二)。 (2) 無常迅速。 (3) 步步念念の觀。

(首書本(百二十))

(1) 倩顧過去年月之如夢、亦知未來時節之無程。彼楊貴妃專房之寵、潘安仁擲菓之戲、李將軍之武勇也、曹子建之賢才也、乃至陶朱之金玉之財、鄭白之衣食之富、名雖留萬代、身不知何去。每思古人之無遺、可觀今世之有終也。又非啻古人之早世矣、親昵之並面、多爲北芒之塵、外人之聞名、併化東岱之煙。何朝何夕從彼逝水。無常殺鬼不擇豪賢、山海空市無遁避者。(2) 故朝露未消之前、曉燈纔殘之間、猶能勵誠觸事可增觀也。巖戶夜深、只憶癡闇之難晴、洞門曉來、應慧日之漸出。西山月傾、有便慕滿月之尊容。翠嶺風扇、無妨欣寶樹之微風。何乍得所觀、

境徒不運心念乎。對師範而學顯密、准預彌陀之說法、爲弟子而加教誡、思濟法界之群類、念念步步悉改三途之業、造次顛沛併成九品之因。

楊貴妃は唐玄宗皇帝の愛妃、楊は氏、名は太真、貴妃は女官の名、白樂天の長恨歌にて能く人の知る所。專房の字首書の如し。潘安仁のこと首書に『蒙求』を引く。美男子にて文才あり、年少き時道に出づれば婦人に取りまかれ、愛せらるゝの餘り美菓を擲ちつけられ毎に車に滿載して歸ること。漢の飛將軍といはれし李廣の武、魏の陳思王曹植字は子建の才、何れも首書に『蒙求』を行く。陶朱公は越王勾踐を扶けて吳を破らしめた范蠡が、後に隱遁して豚を養ひ鉅萬の富を得たときの名。鄭も白も何れも灌漑の用水を作りて利を得たる人、鄭國渠、白公渠の名、萬代に残る。北邙は北邙とも書く、洛陽の北の邙山、墳墓を列ぬる所。外人は内眷屬及昵近者に對する他人のこと。東岱は支那の五岳の一、東方にある泰山。同じく死人を送る地と見ゆ。前に引く白樂天の詩にも出づ。無常殺鬼等四句は『止觀』七之三の文。又『弘決』に『法句譬喻經』一五(正藏二十六套八)を引く。首書の如し。故朝露未消以下は平生の用心を殊に教へたるもの。之を『往生要集』に對映するに、

大文第五助念方法の下に七門を分つ、其第二修行相貌の中に平生計念の相を明して、『涅槃經』を引き菩提の因は唯信心を首とすといひ、更に常途の計念は如何かすべきと問ふて、答に『安樂集』の河を渡らんとするには先づ脱衣の用意をせざるべからずの喩(二河自道の一の據)を擧げ、本願を信じ念佛を稱へよといふを引く。今の文にはかくの如く明白にはあらねども觸面對境、萬縁に歷れて往生淨土の觀想を浮べよといふ。是れ實に和尚の切なる懷襟を巧なる文藻に託して、吾人の前に展開せしめらる。九百年後の今日この虬文に接して誰か服膺せざるものあらんやの感を深くする。念々歩々は天台大師の常行三昧(般舟三昧)の中の語。此語をこの最末に出して、遙かに此書の初の第二章に諸教所讚多在彌陀といひ(常坐三昧の下の『弘決』の語)又『般舟三昧經』を引て彌陀自ら當念我名と喚ぶといふに照應す。一部の始終は實に『般舟三昧經』より出づる天台の觀心念佛を傳へ、それを觀念佛より稱念佛へ發展せしめられし逕路の鮮かなるを思はしめらる。猶此に注目すべきことは、此文に對師範而學顯密とあるの一語、此は疑ふべくもなく。此書が、『往生要集』と異りて自宗を守るの書なることを知る。即ち彼は外に向ふて淨土教獨立の基礎を築きたるに對し、此は内に向ひて一心三觀の宗義を守る。又彼は初より理觀に堪へざるものをして、立相住心の觀より稱名念佛に入らしむる、此は初より圓頓の理觀を主張して、終に至りて徐く散心念佛の一路を開くも、猶此書は淨

土教獨立の趣意にあらずして何處までも天台の顯密の學徒をして、出離の要道に迷惑せしめざらん
ことに勤めたるものと見らる。

六、本集述作の所由を問答す(二節)。

一、問。

(首書本三十五)

問、今以愚駑性集此文豈無後見之嘲乎。

二、答(一)。(一)に自心を練らんが爲の故に。(二)に他人を誘はんが爲の故に。

答、有二故。(一)爲練自心也。「釋」云、常爲心師、不爲心師云云。「玄
樞」曰、但正其心不尙餘學。自心若正萬境咸歸。自心若邪諸塵
有滯云云。「弘決」云、是心無始常曲不端。入正行處心則端直。
如蛇行常曲入筒則直云云。「疏」云、若不作觀方便、於行人無益。
如貧數寶似盲執燭云云。而心不孤起、必託於緣。假文助意、觀心
不亂。既調散心於一境、必遂往生於三輩。

(二)爲誘他人也。挑長夜之法燈、適叶祖師之本懷。傳苦海之船

筏、遙報釋尊之恩德。「經」云、汝等若能如是、則爲已報諸佛之恩云云。

「藥王品疏」云、我傳爾明、爾復傳明。明明無已、師之志也云云。故

不憚短才淺智、爲不成斷種身也。「史記」云、雖有舜禹之智、吟而不

言、不如瘖聾之指麾也云云。實雖瘖聾之身、何亦不導迷者乎。若

義理有紕繆、賢哲必加添削。於衆嘲者敢不辭之。逆順俱結緣、

互欲蒙引導。

常爲心師の語は「往生要集」中末にも出づ、されど釋云の二字なし。今の釋は何を指すか知れ
難し、但し「弘決」四之一には「涅槃經」南本二十六(會疏、續藏五十七套三、二二八)の文を引
く。顯作心師不師於心とある。心の駒に手綱ゆるすなの意なるべし。「玄樞」は第七章の
下にいふが如し。「弘決」は二之一。又是心等の文は「大論」二十三の文である。「疏」は「法華
文句」四に出づ。心不孤起の二句は「止觀」一之四の文に依る。假文助意の二句は「弘決」一
之二の文に依る。叶の字は前にも出づ古文の協の字。經云とは「法華經」囑累品。又「藥王品疏」

○決定往生所念無貳の語意

とは『法華文句』二十九^三に藥王品以下五品を化他流通として、その意義を解釋せらる。今はその中の文である。即ち末法無盡の燈明と爲れとの意。次に『史記』は『漢文大系』六卷、六三二に出づ。

○順逆俱縁の和尚の懷抱 若、義、理、有、紕、繆、の下は『往生要集』卷末の語句と一致する。而も『弘決』一之五^五の文意と一轍である。『弘決』には先づ像末の澆季、この圓頓の教旨を奉ずるもの、寡きを慨き、次に聞いて若し行せざれば汝に於て奈何がせんといふを擧げ、それは久遠の益を知らぬもの、言であるといふて、『善住天子經』下^九を引き、「法を聞いて謗つて地獄へ墮つるは、法を聞かずに只恒沙の諸佛を供養するよりは勝る。何故とならば、法を聞くものは終に地獄より出で、亦法を聞く。聞て謗るものすら尙遠種となる。況や聞思勤修のものをや」とある。『往生要集』の結文は、今まで引いた經論の正文は人皆信するも、私の詞は或は評論誹謗をなすものもあるであらう。されど正道理に稱ふものなれば謗ることも苦しからぬと聊か抱負を述べて、次に若しかりそめにも紕繆あらば改むるに格かならずと謙遜し、更に見る人をして取捨して正理に順せしめよ。されど偏頗的に猶謗る人あらば、予は敢て誹謗を甘受するであらう」と。此處までに既に和尚の微衷を吐露して、今は一步を進むるの餘地なきに見ゆるを、和尚の慣手段、之を徹底せしめて、こゝに佛陀の金言を引く。

即ち『華嚴經』新經七十五^三の偈文を引いて、善も縁、不善も縁、順逆皆是れ來世安養の結縁と結ばせられた。此は今の結文と只具略の異のみにて、趣意は全く一致して居る。この徹底せる和尚の詞を聞て誰か誹謗の唇を翻すものがあらうか。恐くは信得徹することであらう。更に眼を轉じて我宗祖親鸞聖人立教開宗の本典『教行信證』を拜するに。實にその一宗の教旨が和尚によりて徹底せしめられしことは彼の『化卷』(御自釋^三)夫按^三楞嚴和尚、解義、乃至勸^三勵^三極重惡人唯稱彌陀^三の一文によりても知らるゝが、今や筆を闇くに當つて、唯佛恩の深きを念じて人倫の嘲を耻ぢず、若斯の書を見聞せん者は信順を因とし、疑謗を縁とし、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顯はさんと述べて、此に『安樂集』の同類の文を引き、最後に今いふ所の『往生要集』最終引用の『華嚴經』の偈文を書き記し置かる。予輩はこの一器瀉瓶の祖師の域心を拜して、何となく意遠く趣き遙かなるものあるを覺わ特に予輩は宿世に於てこの疑謗者の一人であつたかを思ひ、愈々信服讚仰すべきことを誓はせらる。

○歸 敬 文

南無阿彌陀佛、南無觀世音菩薩、南無得大勢菩薩、

南無極樂界會一切清淨大海衆。
南無十方三世一切三寶。

歸敬文——
總——十方……一切三寶
別——極樂
三尊——主……彌陀
伴……觀勢二菩薩
一切聖衆……海會

觀心略要集講錄 第一編終

(大正十二、五、念一脫稿)

284
81

終